ショパンのプレリュードの研究
——ポーランド国立図書館蔵の自筆譜の研究X——

A Bibliographical Study on Chopin's Preludes op.28
by Autograph Note in Polish National Bibliotek. [10]

佐　藤　允　彦

プレリュード第13番　嬰ヘ長調

この曲の自筆譜は、現在刊行されている各版とは全く違っていることに驚く。まず、この曲の自筆譜は二分の三と書かれており、現在の各版は四分の六に訂正されている。ドイツ、フランス、イギリスの初版本もショパンの書いた通りの二分の三になっている。この拍子記号も最初に書いた拍子を消して、改めて二分の三に書き改めたものであって、自筆譜では最初に書いた方の拍子は読みとれない(写真1，2)。また速度標語も Lento 以外は二度訂正しており、上部の訂正は non troppo を書き込んでから消去して、また下部に ma non troppo と書いてからそれも消去したものである。拍子、速度標語ともにショパンはかなり迷いながら仕上げた作品である。低音部譜の下に書かれた legato の前に消去された文字が見えるが、どうやら semple を消去したもののように見える(写真4)。

ドイツの初版楽譜は Breitkopf & Haertel の6088番であり、その後に出版された同じ出版社の11638番でもまだ二分の三のまま出版されており、もう少し詳細に各国の出版楽譜を見なければどの時点で四分の六に訂正されたのか、誰がその訂正の先鞭をつけたのかが明らかではない。現在ポーランドから出版されつつある「新ポーランド版」ともいうべき J. エキエル教授のプレリュードのコメンタージュにもその点は触れられていない。

この曲の自筆譜は非常に綺麗にかきあげられており、別のスケッチブッ

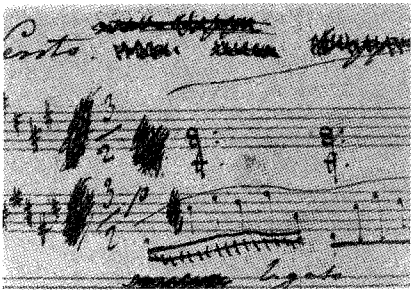


写真１　op.28-13.T.1

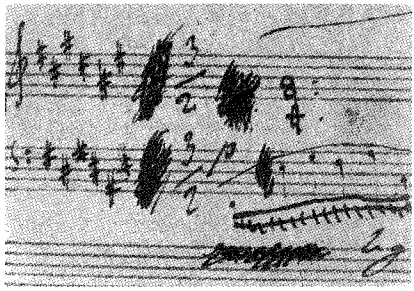


写真２　op.28-13.T.1

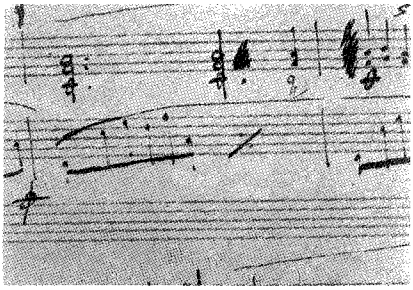


写真３　op.28-13.T.3

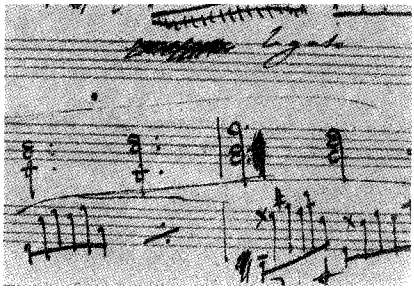


写真４　op.28-13.T.5.6

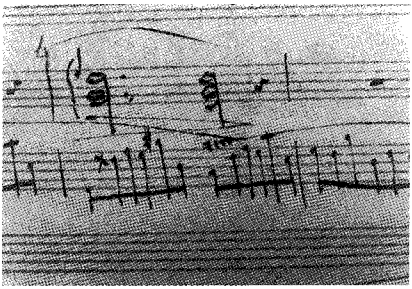


写真５　op.28-13.T.7

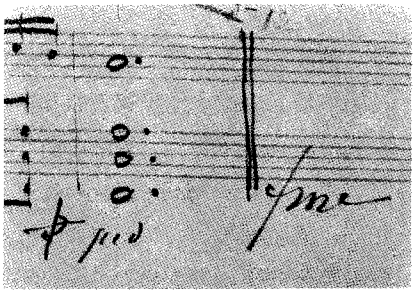


写真６　op.28-13.T.38

クに書いてあったスケッチ状態であった曲をマヨルカで完成したか、或いは別紙に作曲されていた曲を書き写したものかもしれない。インクの色はマヨルカ産のものではないかと思われる淡色のインクで、一気に書きあげられているように見える。T7(写真５)の右手第一音に付けられた小さな四分音符は小さな八分音符に書き換えたエディションも多く見られる。この曲では低声部が同じ音形をとることが多い為に、ショパンは省略記号を多用している。T3(写真３)の後ろの拍やT5 の後ろの拍にも略号が用いら

れている。piu lento からの部分はショパンも特にこの部分が気に入ったのか、あるいは特に歌って欲しいと考えたからか、ペダルは入念に書かれている。最後の二小節は消去訂正した跡が残っているが、透かして見ると最初と同じである(写真6)。

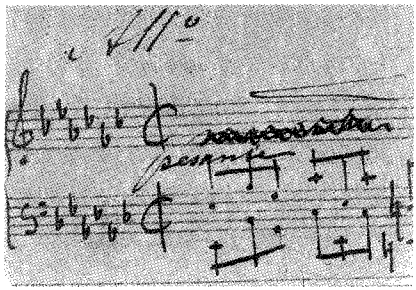


写真7　op.28-14.T.1

プレリュード　第14番　変ホ短調

初版のドイツ版はショパンと同じアッラ・ブレブ、二分の二をとっているが、フランス版とイギリス版では四分の四になっている。写譜者のフォンターナとヴォルフが、訂正したのであろう。速度標語はショパンは Allegro としているが(写真7)、オックスフォード版だけが特にショパンの最後の弟子ジェーン・スターリングのために訂正したエディションであったためか Largo になっている。この曲も前の嬰ヘ長調と同じように、ほぼ完成したスケッチから写しかえられた作品らしく、訂正が少ない。T1の高音部譜表で消去されているのは、con moto であったとみられる。ショパンの自筆譜のなかでも、もっとも綺麗な楽譜であり、明らかに書き写されたものと見える。T15に少し汚れが見えるが、これは第13番のT37小節の消去跡が染みだしたものである。この作品もパリで作曲されていたものであろう。

プレリュード　第15番　変ニ長調

「雨垂れ」の愛称で親しまれている最もポピュラーな曲であろう。この曲もパリで作曲されて、マヨルカで加筆、訂正された作品と思われる。訂正や加筆のインクの色と主要な音を書き込んだインクの色が微妙に違っていたり、省略記号の他に数字を用いるなど、早く書き上げたい意志は鮮明にでている。特にT60以後はマヨルカで書かれた説が強い。T4 の7連音

符の前に付けられた小さな八分音符のアッポジアトゥーラは(写真８)、エキエル版、ヘンレ版、ウィーン原典版以外はすべて斜線付きとなっているが、ショパンの自筆譜では小さな八分音符になっている。T17の低音部の第四拍は、ショパンの自筆譜では一点ミの音は書かれておらず、ヘ音だけになっている(写真９)。初版楽譜をみると、フランス版だけがショパンの書いたヘ音だけになっており、ドイツ版とイギリス版には es の音が書き込まれている。T19(写真10)の左手第三拍のFの音にクロイッツアー版は四分音符の符尾をつけているがショパンはつけていない。その次のG音にショパンは四分音符の符尾を付けているが、フランス、ドイツの初版楽譜では欠落している。これを付けているのは、エキエル、ヘンレ、ウィーン原典版、ミクリ、カルマスなどのエディションだけである。

T28の sotto voce に入るまえ、T27のあとでショパンはかなり迷っていたようである(写真11)。どの様に次の楽句に移るか、この場面ではどの作曲家も迷いに迷っている姿がみえる。T28から43までは、一気に書き上げたようである。そして躊躇うこともなくT28小節のうえからT42まで各小節のうえに１から15までの数字を書き込み、省略をする書法をとっている。T33の低音部の第四音は、いまの楽譜では大字ほ音になっているが、ショパンの自筆譜では大字は音になっていて、各初版本でもショパンの自筆譜と同じにしている。T43につづいてT44からは小節線で区切るだけで、各小節線内に略号の数字だけが記入されているばかりである(写真12)。つまりこの部分は全く同じであるとショパンは記しているのに、数字の１にあたるT44に多くのエディションでは pp を書き込んでいる。エキエル版では括弧付きの(pp)にしているが、これは演奏家がこれまで慣れ親しんできた楽譜に対する注意を喚起するために付則したものであろうと解釈している。T58が数字の15にあたり、次のT59までは同色のインクである。そしてT60(写真13)からは少し淡い色調のインクで書かれていることから判断すると、ここからは違った時期に書かれたものであるとみてよい。つまり以後は多分マヨルカでスケッチから起こしたか、作曲したものであると考えられる。T60から多少の修正はみられるものの、かなり綺麗に書いている。T61を綺麗に塗りつぶして次の段に書き換えているが、この訂正は

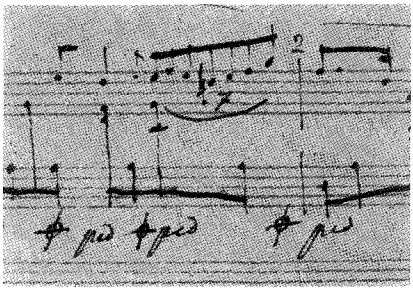


写真8　op.28-15.T.4.5

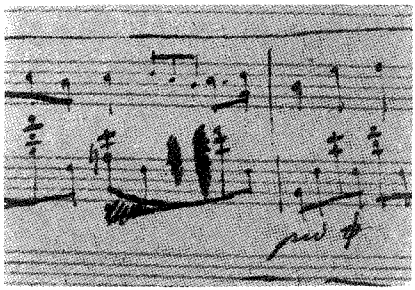


写真9　op.28-15.T.17.18

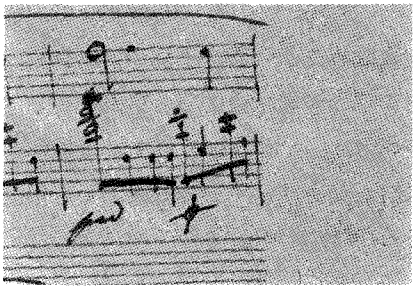


写真10　op.28-15.T.19

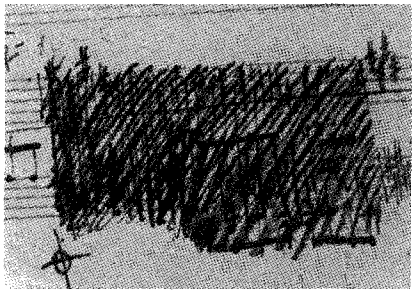


写真11　op.28-15.T.27

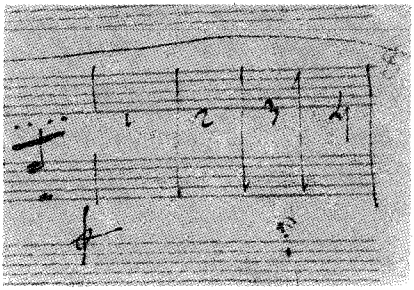


写真12　op.28-15.T.44

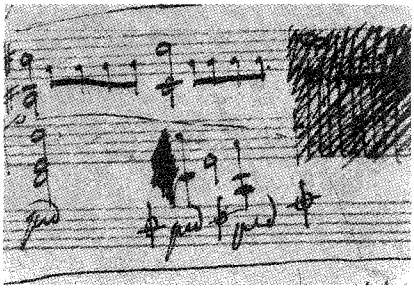


写真13　op.28-15.T.60

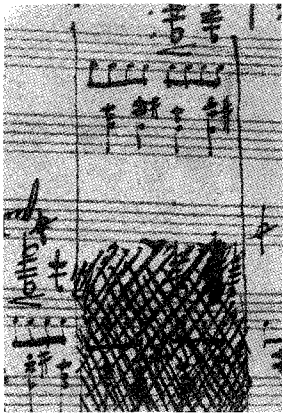


写真14　op.28-15.T.65

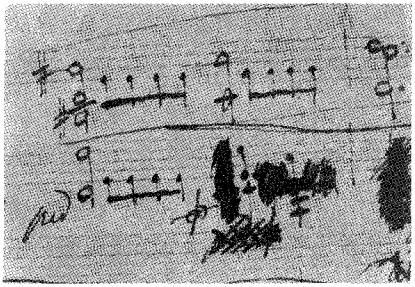


写真15　op.28-15.T.68

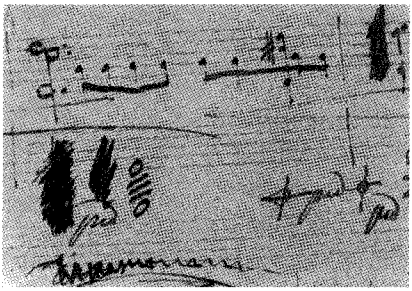


写真16　op.28-15.T.69

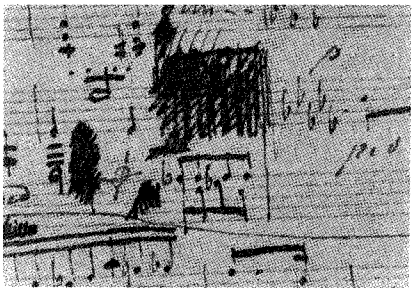


写真17　op.28-15.T.75.76

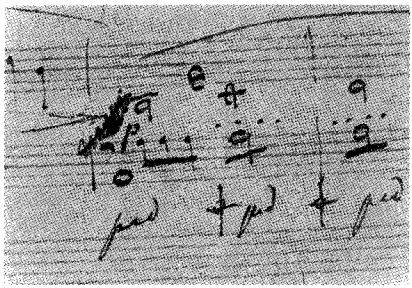


写真18　op.28-15.T.84

読み取れなかった。T65でも書き損じて下の予備譜表に書き込んでいるが(写真14)、ここもこれまでと同様に訂正前と同じであると読めるのである(写真15,16)。T75で曲は嬰ハ短調から変ニ長調に転調する。ここでもショパンは緊張してか、書き直しをしているが(写真17)、この訂正は綺麗に塗りつぶされていて読めない。T84のpのまえになにかを書き込んで消去した跡が見える。ルーペで詳しく調べてみると、forzato を消してpに書き換えたように見える(写真18)。

プレリュード　第16番　変ロ短調

この曲は、第15番変ニ長調より前に作曲されていた曲ではないだろうか。曲の最後を飾る fine の字体、書法がよく似た筆法で書かれており、また変ニ長調の曲のT78はこの曲のT17の丁度裏側になっていて、T17の低音部を消去、訂正したインクの染み跡が裏に滲み出しており、ショパンはそこを上手く避けながら変ニ長調の曲を完結したようにみえる。この事実は、第15番より第16のほうが先に書かれていたことを示している(写真19)。

この曲全体を詳細に観察してみると、中間色のインクの色調が目立つ。ショパンがマヨルカに殆ど完成した状態で持ち込んだ曲の一つと見てよい

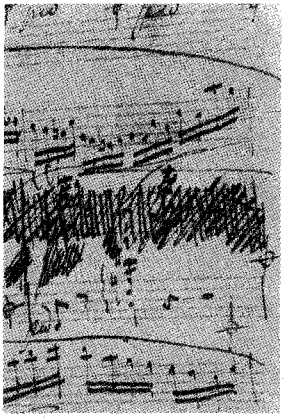


写真19　op.28-16.T.17

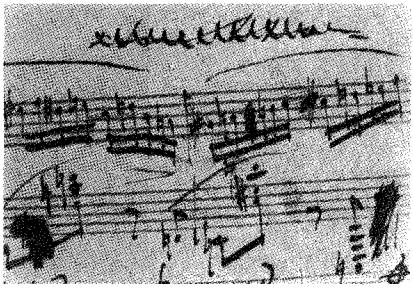


写真20　op.28-16.T.28.29

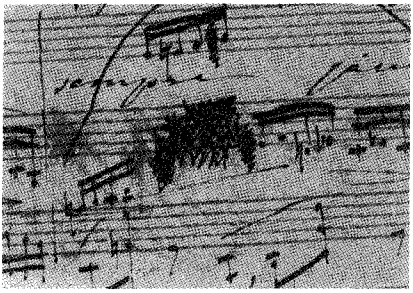


写真21　op.28-16.T.34

のではないだろうか、加筆した淡い色調のインクが目立つのである。目立つほど少ない、という事である。

先に述べたT17の修正の跡が目立ち、さらにT28,29(写真20)の高音部譜表の上に crescendo と書いて消去した跡、T29の後ろの拍を書き直し、T33の最初の拍を書き改め、T34の前拍の後ろを訂正するなどしているが、書法上での大きな乱れは見られない(写真21)。ペダル記号も既に書きこまれていた。速度標語 Presto con fuoco はマヨルカで書かれたようにみえる。

プレリュード　第17番　変イ長調

この曲は、マヨルカに行くまえに、かなり出来上がっていた曲の中にはいる。

面白いことに、ショパンは最初四分の四を示すCの拍子記号を書きながら、突如八分の六と書き直しているのである(写真22)。或いは、全く違う曲を予定していたのかも知れない。第一小節の後ろの拍と第二小節は略号でかかれている。また速度標語の Allegretto や一部のペダル記号はマヨルカで書かれたようにも見える。T19で転調するとき、やはり何かのためら

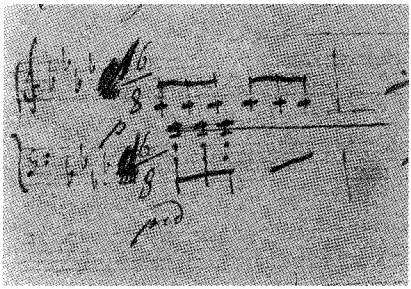


写真22　op.28-17.T.1

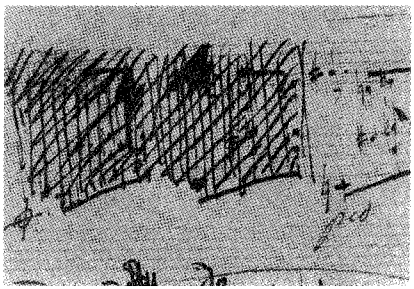


写真23　op.28-17.T.18.19

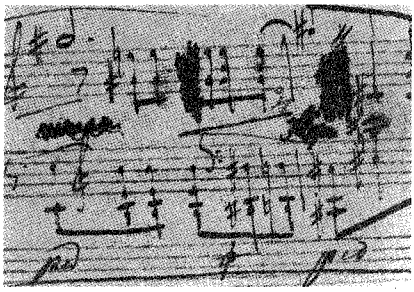


写真24　op.28-17.T.46.47

いがあったのか消去、訂正している(写真23)。その後、7小節にわたってオープニング・ウエッジなどを書き込んで消去し、改めて Crescendo と書き改めている。T46に Cres. とかきこんで消去、次のT47に Fz として削除している(写真24)。気分的な高揚をどのように作り上げるか、苦心をした跡が歴然と残っている。T58の上声部を完全に書き換えているが、もとの書法はみえない。T62.63.64 は略号で書いている(写真25)。T67.69 の右手第一音に当初音を置いていたが消去して、その後休止符を書いている。

プレリュード　第18番　ヘ短調

この曲も、殆ど完成されたかたちでマヨルカに持ち込まれたのであろう。どちらかというと、かなり荒々しいタッチで書かれた楽譜であって、中間色のセピア調の強いインクで書き飛ばされたという感じが強い。作曲当時に一度書き込んだ速度標語は、Presto con fuoco であった。それを、消去して Allegro molto に変えているが、始めに書いたプレストのPのルーピングをそのまま残して縦軸を引き、横にＬＬＯを書いてＡＬＬo、つまりアレグロの略記をしているのである。T1 の消した部分は自筆譜でははっ

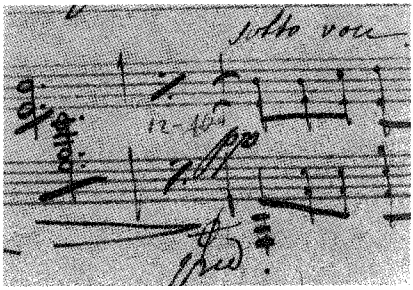


写真25　op.28-17.T.64.65

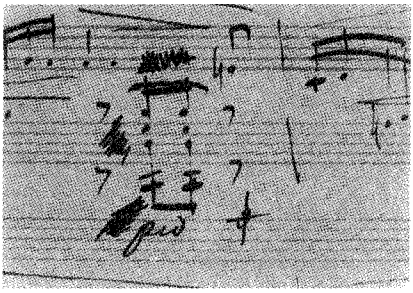


写真26　op.28-18.T.2.3

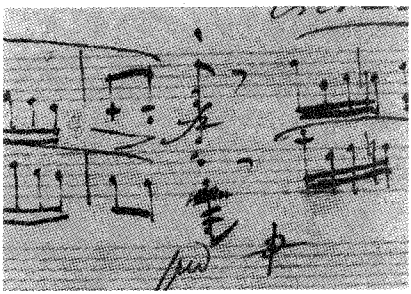


写真27　op.28-18.T.9

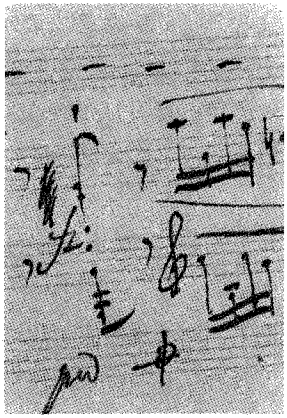


写真28　op.28-18.T.10

きりと読め、最初は左手もユニゾンで右手と同じ音形を弾くようにしていたが、修正して左手に八分音符二つにし、それを予備の中間譜にかきこんだものである。曲全体は四小節単位の小楽節で構成しているが、始めの二小節では後ろの拍に付点四分音符を置いて、三・四小節に激しい十六分音符のラッシュを書き込み、第八小節で22連音符をおいて、T9・10(写真27)小節では主になるスタッカーティシモの記号と forzato を付けられた八分音符が新しいリズムを示している。自筆譜で見ると、T1,2,5,6(写真26)に書かれた付点四分音符の下にペダル記号は書かれていない。付点四分音符を弾いて、その音を確認してから内声部とバスを弾くときにペダルを入れるようにずらしてある。

これに対して、T9,10,11,12のスタッカーティシモの音では、その真下にペダル記号を書き込んで(写真28)、ユニゾンで動く十六分音符の走句にはペダルを使わないように工夫している。さらにT13,14,15,16,17,18の

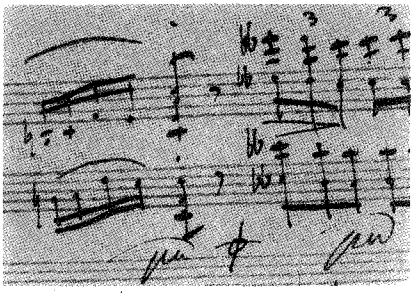


写真29　op.28-18.T.13

ドットをつけたスタッカートの音にもペダルを付けて、その音を響かせるようにしている。ショパンは実に注意深くペダル記号を付けており、これを忠実に守らなければ、ショパンの意図した音楽にはならない。特にT17,18の長いペダルは、下降する走句があり、その先に下一点と大字のF音のトリルが設定してあって、この曲のクライマックスとなっている部分であるだけに、ペダルには注意しなければならない。エキエル版はペダルは忠実に再現しているが、T13(写真29),14,15のスタッカーティシモの記号をドットに変更している。

プレリュード　第19番　変ホ長調

この曲も、ある程度まで出来上がっていたものである(写真30)。かなり苦労して書いたものらしく、プレリュード全曲をセットしたときのページとしては29、30ページが当てられているのであるが、29ページの消去跡が裏に強く滲み出ていて、全く使えない状態にまで汚れている。また30ページの上部5段の譜表の消した跡が31ページに滲み出ているため、31ページに書くべきハ短調の曲は汚れを避けて書かれている。

この自筆譜は中間色のセピア色のインクが目立っている。作曲しながら、気に入らないと直ぐに消して予備に設けてある段に書き込むという手法をとっている。プレリュードの中では消去跡が目立つ、いわば汚い楽譜にみえるが、以外と時間をかけずに、一気に書き上げた作品であるようにも見える。つまり時間をおいて、マヨルカで加筆を繰り返したといった跡がみえない。

曲の冒頭から、省略する事を考えていたらしく、1から10までの数字を各小節の上部に書いている。1から8小節まで始めは細かいスラーを付けていたが、それを消去している。自筆譜では消去した跡が残っているので、

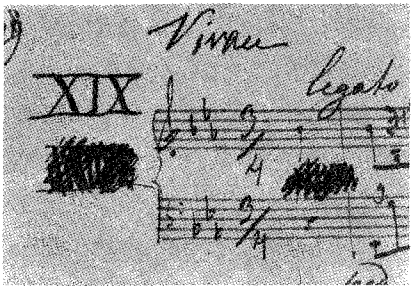


写真30　op.28-19.T.1

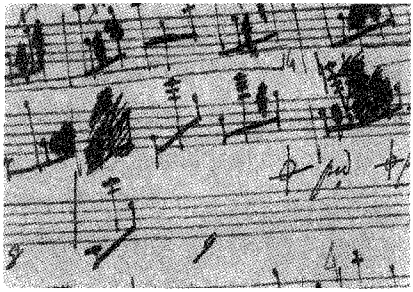


写真31　op.28-19.T.2

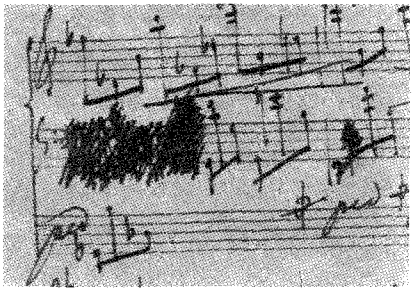


写真32　op.28-19.T.21

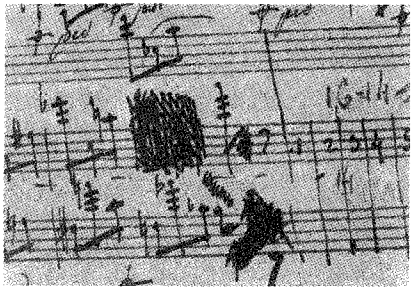


写真33　op.28-19.T.32

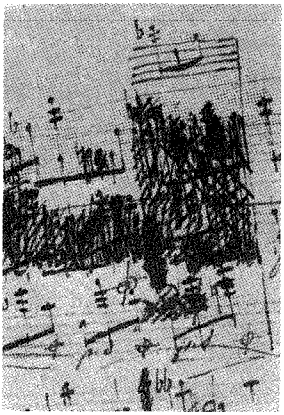


写真34　op.28-19.T.44

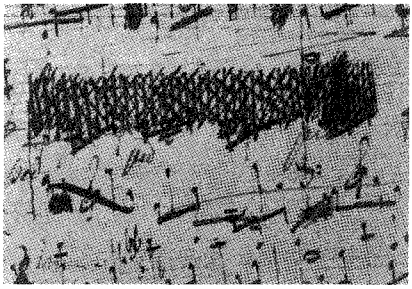


写真35　op.28-19.T.46,47

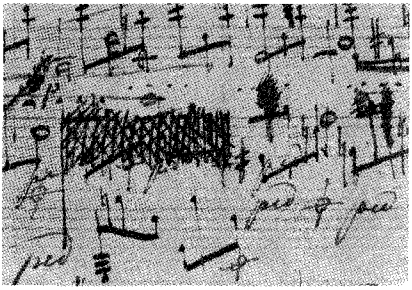


写真36　op.28-19.T.62

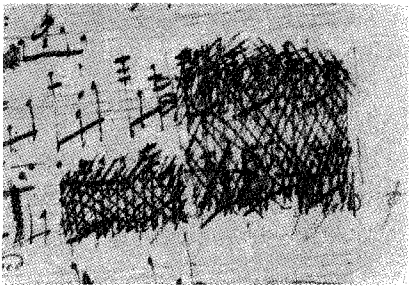


写真37　op.28-19.T.53

これを見ると演奏解釈上の参考になるかも知れない。T2 の低音部の書き換えは、バスの大字ほ音が欲しかったために書き改めたものである(写真31)。T9,10,13 の変更も読み取ることは出来ない。T15の低音部は始めに書いた音と同じになっている。T19の第二拍の左手は、小字ハ音を変イ音に書きかえたもので(写真32)、これは明らかにショパンのミスの訂正であろう。T32の第三拍の元の音は、読めない(写真33)。T33からは、例のごとく数字だけの略記法をとっている。T44(写真34),47(写真35),48の変更もこれまでになく強く消してあるため、元の書法を読むことが出来ない(写真36,37)。T71,72(写真38)では、アルペジオを消してある。fine の書体は第24番ニ短調と同じで、或いはこの作品はかなり早い時期に書かれていたものかも知れない。リーフの状態からみても、書き上げられていた曲を第19番として組み込んだ可能性もある。第19番とするローマ数字も間違えて記入したらしく、黒々と塗りつぶしている(写真30)。

プレリュード　第20番　ハ短調

前の第19番の滲み跡を避けて、上の5段を空けてこの作品を書いている。自筆譜は8小節を書き、その後半の4小節の下にアルファベットａ，ｂ，ｃ，ｄを書いて、その部分を繰り返すように、更に＊印を付けて出版社に対しての注を付けている。この曲も時間をかけずに一気に書き上げたに違いない、きれいな楽譜である。

T2 のバスを書き改めているが、もとの音の状態は見えない。符頭や符尾の書法は、第19番によく似ている。この点や＊印付きの注から判断すると、かなり早い時期、それもパリで書かれていた曲に違いない。

「ロシュシュアール通りの出版社への注。ときには理にかなったことを言う Mr. XXX に一寸妥協した。」という＊印の注はブランドス社に宛てたもので、Mr. XXX という人はフランソワ・アンリ・ジョセフ・ブラーズというパリにいた劇作家、批評家、作曲家のことである。一応コンセルヴァトワールにも入学し、音楽理論や器楽の勉強を本格的にしていた人物であった。「論争」という文芸評論誌に、Mr. XXX のペンネームで執筆し

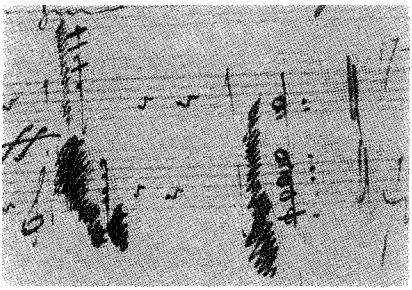


写真38　op.28-19.T.70,71

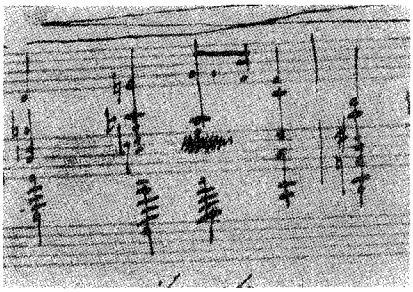


写真39　op.28-20.T.3

ていた評論家として知られていた。ショパンがこの作品を作曲した時に、偶然居合わせたのかもしれない。ショパンに8小節で終わるのではなく、後ろの4小節を繰り返すように言ったのであろう。

この曲でいつも問題になる第3小節の第4拍のソプラノの一点ホ音に、ショパンはフラットの記号を付けていない(写真39)。同じ小節の中で先にある第2拍の一点ホ音にはナチュラルが付いているから、理論的には第4拍のホ音は第2拍と同様に弾かなければならない。ドイツ、フランスの初版版はショパンの書いた通りになっており、イギリスのウェッセル版には第3拍のホ音にフラットが付けられているのである。調性と和声進行から考えると、第4拍のホ音にフラットを付ける方が自然な流れに聞こえるという理由で様々なエディションがフラットを付けている。参考までにフラットを付けている楽譜はHV,PD,COと最新のエキエル版もフラットを付けている。その他の版には、フラットは付けられていない。COとWUにはフラットが付いているが、脚注にショパンが変更したからとしてWUは括弧つきにしている。fineは、op.33-2の書体に似ている。

プレリュード　第21番　変ロ長調

速度標語が抹消されて、書き換えられている。それほど念入りに消してないので、読めそうに見えるがかなり難しく、Allegrettoを消したようにも見えるが、書き直しのCantabileから判断すると、Andanteを書き改めたものであると見たほうがよい(写真40)。

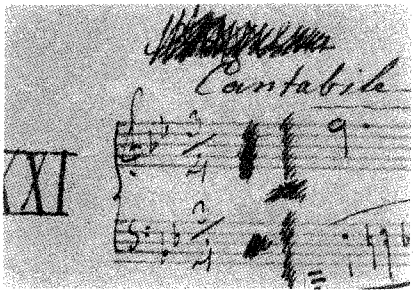


写真40　op.28-21.T.1

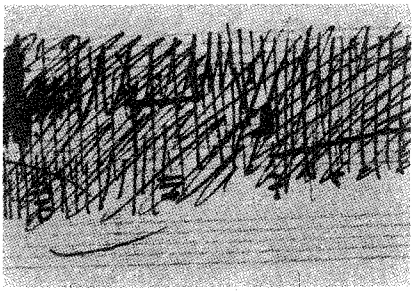


写真41　op.28-21.T.50

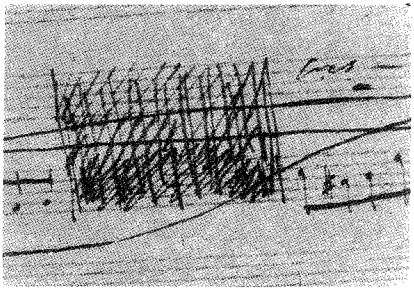


写真42　op.28-21.T.55,56

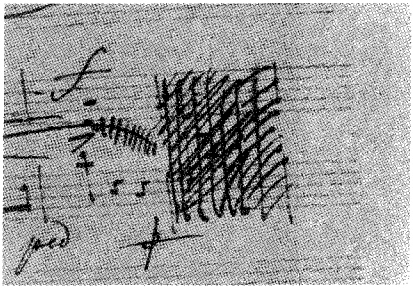


写真43　op.28-21.T.57

写真44　op.28-22.T.17

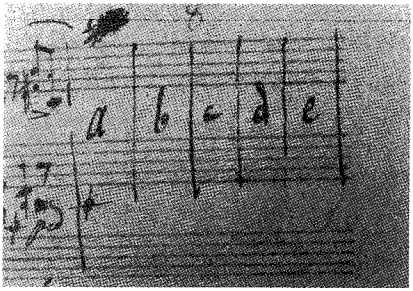


写真45　op.28-22.T.25

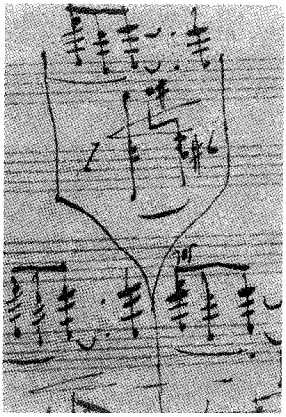


写真46　op.28-22.T.37

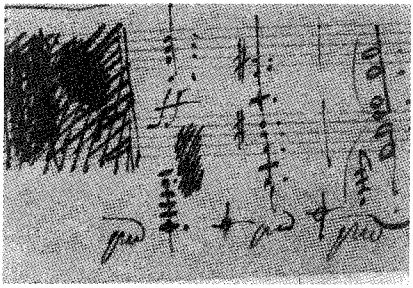


写真47　op.28-22.T.40.41

この作品は、前の第19、20番に比べて、淡い色調のインクの色が際立って見える。さらに、自筆譜ではこの曲を32、33、34の3ページに書いているが、T48から曲の終わりまでを書いたリーフは34ページをあてており、上部4段と下の2段を空けて曲を書くという一見不自然で無駄な書き割りがあるように見える。34ページの裏、35ページには第22番ト短調が書かれており、ト短調の曲の部分的な消去跡のインクがここでも裏ページに浸出しているために、その部分を避けた結果無理な書き割りをしたように見えるのである。この書き方から見ても、変ロ長調の曲はト短調より後に書かれたという事実が明白になっている。先に述べたように、淡色のインクで書かれている点などから判断すると、この曲はマヨルカで着手、作曲されたものに違いない。T48,49(写真41)とT56(写真42,43)を書き換えているが、淡色のインクで消しているのに元の音符が上手く見えない。fineの書き方は、第1番ハ長調と第5番ニ長調の字体と酷似している。

プレリュード　第22番　ト短調

自筆譜のページを示す35や速度標語 Molto agitato の文字が淡色のインキで書かれており、この曲もパリで着手されたものの完成されずにマヨルカに持ち込まれた可能性が強い。T7は略号で書かれ、T8の高音部譜表の八分休止の次のコードが四分音符で書かれているが、これは明らかにショパンの間違いであり、八分音符で書かなければならないところである。T17のフォルテッシモから8小節の下部にアルファベットのa，b，c，d(写真44)，e，f，g，hを書き込んで省略記号化することにし、続くT25以後は小節線で区切ってa，b，c，d，e，f，g，hと書いている(写真45)。T34の右手に書き換えがみえるが、これはいま表記されている音と同じである。T36からT38と書いていたが、あとでT37を一小節加筆して現在の曲になっている(写真46)。最後の2小節を書き改めているが、ここも入念に消去されているため元の音は読めない(写真47)。fineの書体は、第11番ロ長調のfineに近い書法である。

参考資料

楽　譜

1．AA 自筆稿（Autograph）.

2．FA 複写譜（Faksyimilowane Wydanie Autografow F. Chopina-Zeszyt I. Fryderyk Chopin 24 Prelidia. Rekopis Biblioteki Narodowej w Warszāwie. wstepem opratrzyl Wladystaw Hordyński. Polskie Wydawnictwo Muzyczne, Kraków 1951）.

3．FCI フランス版、カトラン版初版本（24 Préludes pour piano, dédiés à son ami Camille Pleyer, par Fré. Chopin. 1 livre. Divisé en deux Livres. Prix F^{fr} 50. Paris, chez AD. CATELIN et Cie. Editeurs des Compositeurs réunis, Rue Grange Batelière. No.26. AD.C（560）et Cie. Londrer, Chez Wessel et Co. Leipzig, Chez Breitkopf et Haertel.）

4．FC2 フランス版、ブランデュ社（24 Préludes pour le piano, dédiés à son ami Camille Pleyer, par Fréd. Chopin op.26. Divisés en deux Livres. Prix q^{f}. No. Paris, Chez Brandus et Cie. Editeurs 103 Rue Richelien. St. Petersbourg, Maison Braudus. B. et Cie. 4594. Londres, chez Wessel et Cie. Leipzig, chez Breitkopf et Härtel.）

5．DB ドイツ版、初版、ブライトコップ・ウント・ヘルテル社（Vingt-quatre Préluder pour le piano, dédiés à son ami J.C. Kessler par Fréd. Chopin. Oeuvre 28. Propriété des Editeurs, Pr.2 Rthlv. Leipzig chez Breitkopf & Härtel. Paris, chez Pleyel & Co. 6088. Enrégistré dans L'Archive de L'Union.）

6．EW イギリス版、初版、ウェッセル社（Book of Twenty Four Grand Preludes through all Keys for the Piano Forte, dedicated to his friend, Camille Pleyel by Fred, Chopin. Performed by the author at the court of St. Cloud. Copyright of the publishers. op..Ent. Sta. Hall. Price 6/ca. this work for p.s. *Book* 5 & 6 of Chopin's Grand Studies. London. Wessel & Co. Importers of Foreign Music & Publishers of all the Works of Chopin. Kuhlau. Hummel. & C. No.67 Frith Street. Corner of Soho Square. Paris. Catelin & Co. Leipzig Breitkopf & Co.）

7．SC.1 シャーマー版楽譜（Schirmers Library of Musical Classics. vol.1547 Carl Mikli edition.）

8．SC.2 シャーマー版楽譜（Schirmers Library of Musical Classics. vol.34 Rafael Joseffy edition.）

9．PT.1 ペテルス版楽譜（Edition Peters. No.1908a. Herrmann Scholtz ed.）

10．PT.2 ペテルス版楽譜（Edition Peters. Leipzig, No.6217 Herrmann Scholtz.）

11．PD パデレフスキ版楽譜（Chopin Complete Works editor Paderewski

I.P.W.M.)

12. WU ウィーン原典版楽譜 (Chopin, 24 Preludes op.28. Hausen/Demus. Wiener Urtext Edition. UT 50005 Musikverlag Ges. m. b. H. & Co., K. G., Wien.)
13. HV ヘレン版楽譜 (Frédéric Chopin Préludes. Nach Eigenschriften und den Erstausgaben Herausgaben und mit Fingersatz Versehen von Hermann Keller. G. Henle Verlag München-Duisburg.)
14. CO コルトオ版楽譜 (Chopin 24 Preludes op.28 student's. edition by Alfred Cortot. Transl. by David Ponsonby, Editions Salabert, Paris.)
15. BH ブライトコップ・ウント・ヘルテル版楽譜 (Preludes, Scherzos, Impromtus für das Pianoforte von F. Chopin. Neue Ausgabe. Leipzig Breitkopf & Härtel 11638.)
16. RI リコルディ版楽譜 (Ricordi, Chopin, 24 Preludui op. 28 per Pianoforte. Brugnoli-Montani. E.R.2521.)
17. KA.1 カルマス版楽譜 (Kalmus Academic Series. Alexander Lipsky. 3337.)
18. KA.2 カルマス版楽譜 (Kalmus Piano Series. Ed. Mertke. 3332.)
19. KA.3 カルマス版楽譜 (Kalmus Piano Series. "First Critically revised Edition", 3343.)
20. DU デュラン版楽譜 (Edition Classique Durand. Claude Debussy.)

文　献

A. Maurice J. E. Brown; *Chopin: an Index of his works in chronological order*. Robert Maclehose and Co. LTD. University Press. 1972.

B. Krystyna Kobylańska; *Rekopisy utworów Chopina Katalog* Im Verlag Polskie Wydawnictwo Muzyczne, G. Henle Verlag München. Krakau 1977.

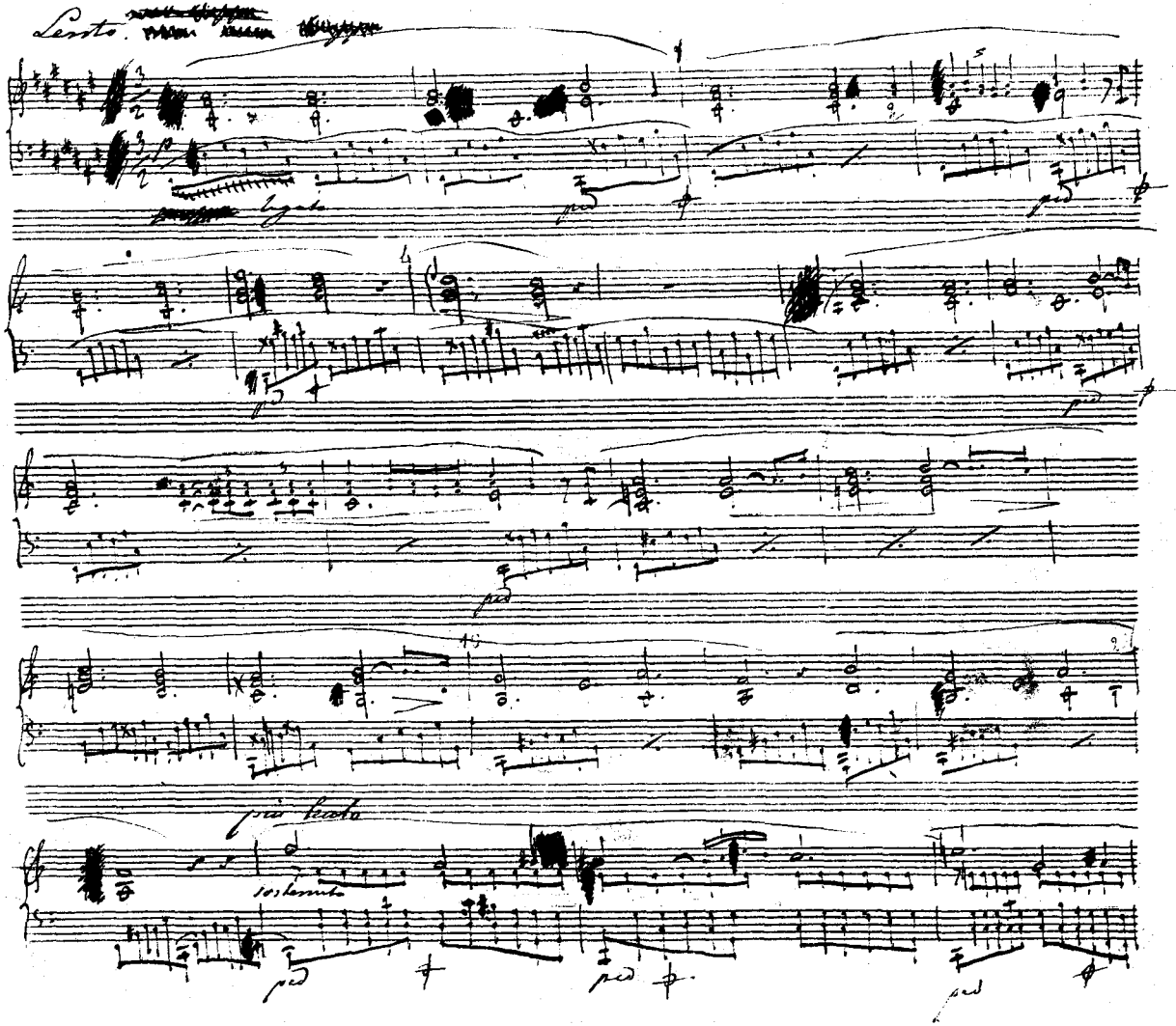
C. Krystyna Kobylańska; *Rekopisy utworów Chapina Katalog* Vol.1, Polskie Wydawnictwo Muzyczne 1977.

D. Krystyna Kobylańska; *Rekopisy utworów Chopina Katalog* Vol.2, Polskie Wydawnictwo Muzyczne 1977.

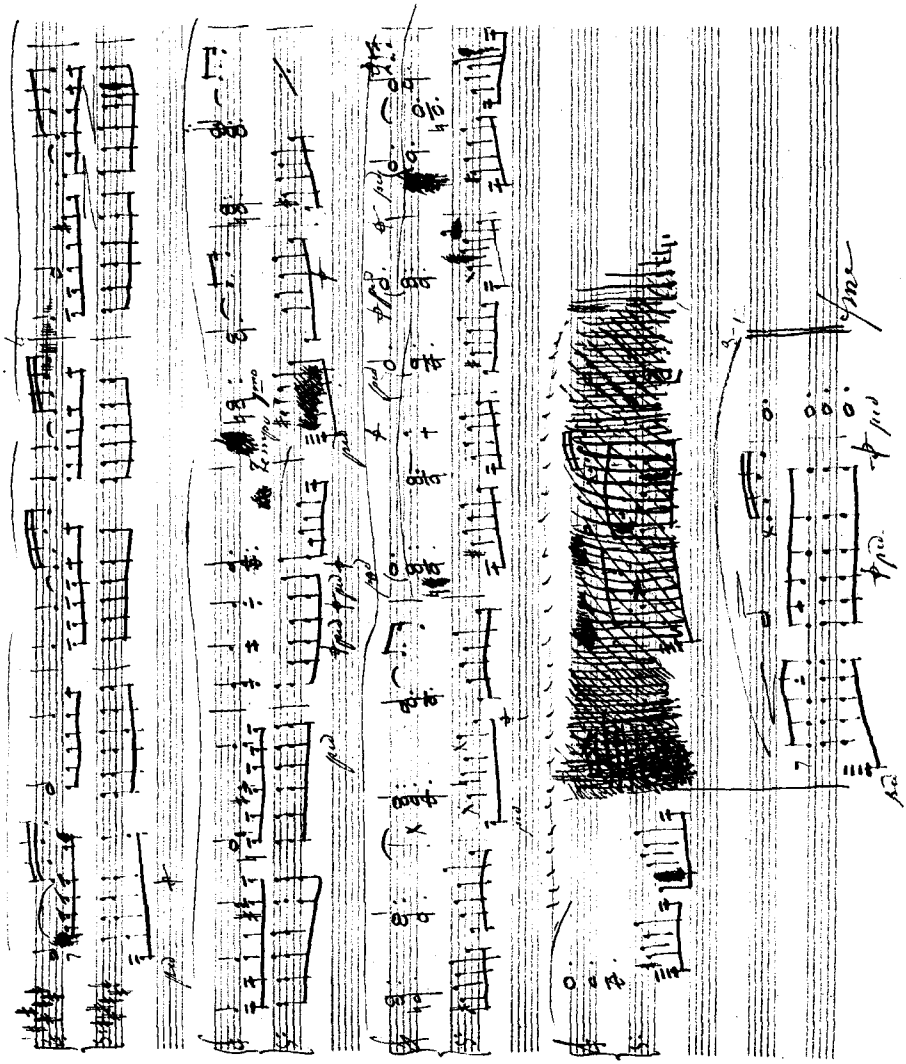
E. Jean-Jacques Eigeldinger; *Chopin vú par ses élèves,* Nouvelle Édition Entièrement remaniée, A La Baconnière-PAYOT.

F. アンドレ・ジイド；ワイルド・ショパン（渡辺・中島・河上訳）新潮社。

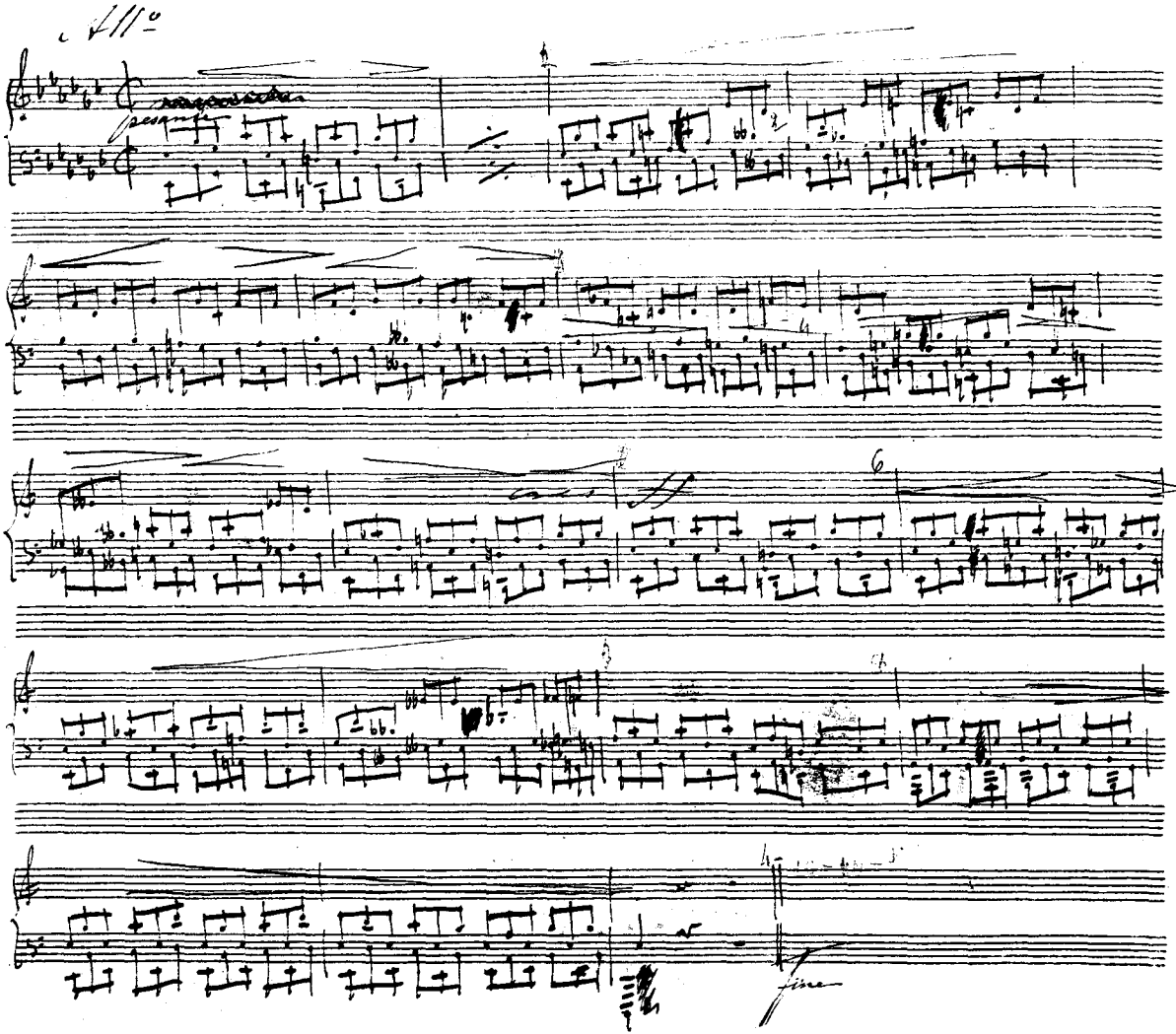
G. Chopin Studies 1. "Comparative graphic expert examination of four Specimens of letters allegedly written by Frederick Chopin" by Zbigniew Czeczot Andrzej Zacharias" Frederick Chopin Society Warsaw 1985. pp. 157～163



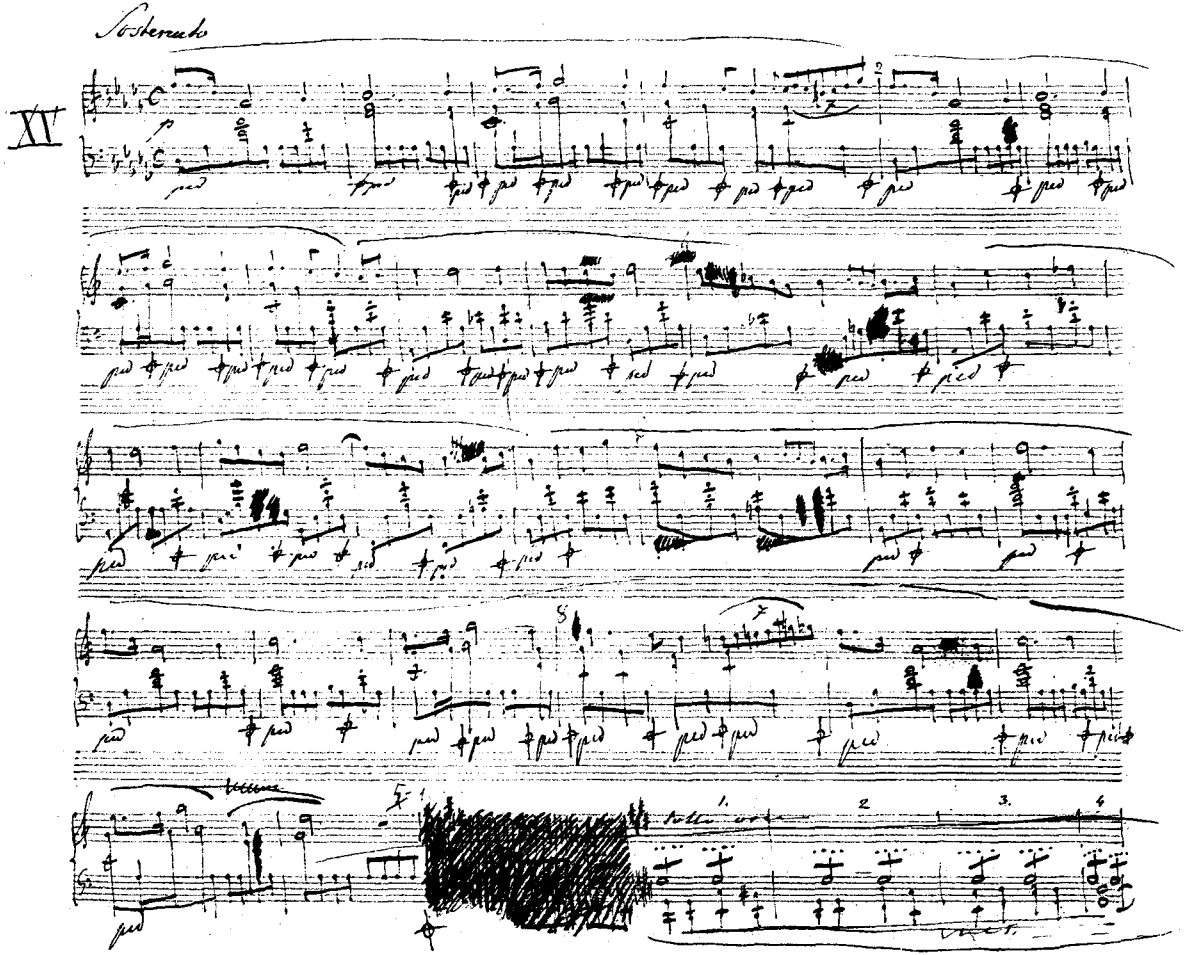
自筆楽譜　プレリュード第13番　嬰ヘ長調①



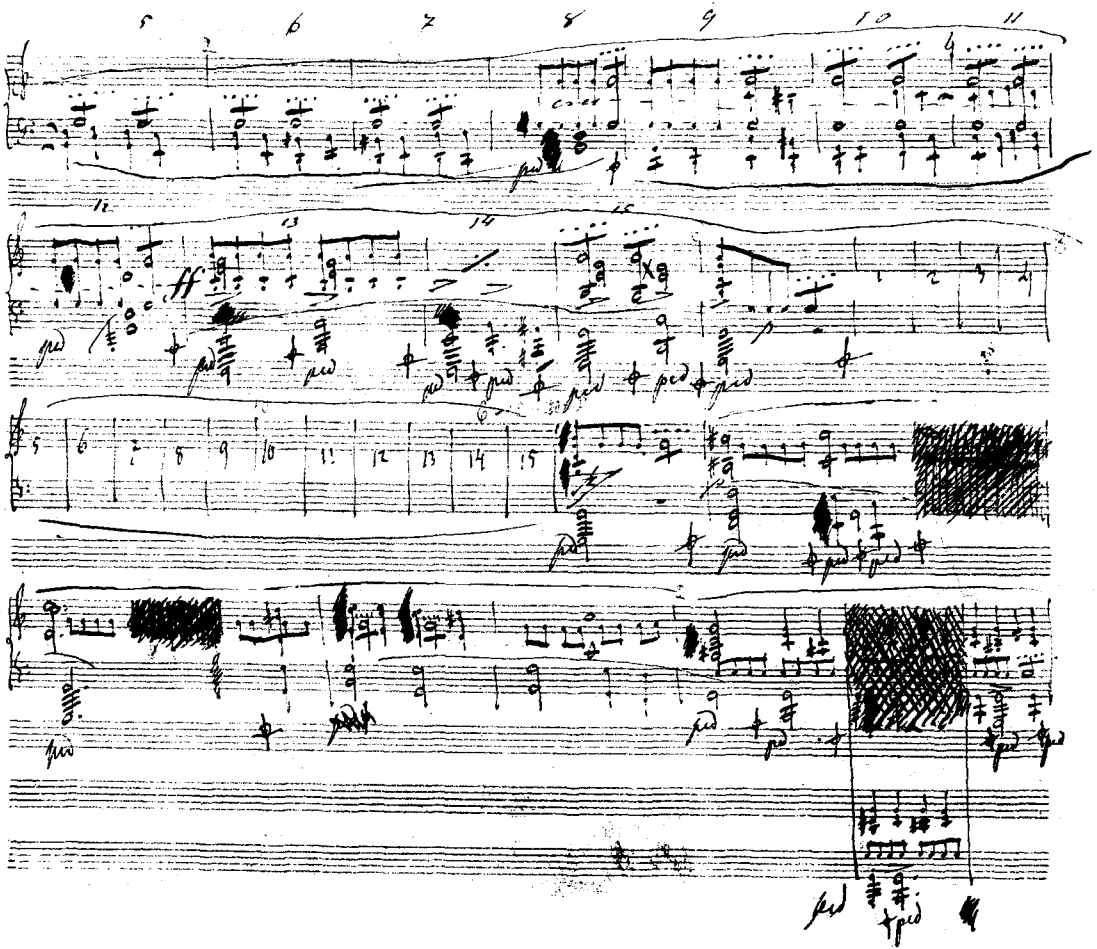
自筆楽譜　プレリュード第13番　嬰ヘ長調②



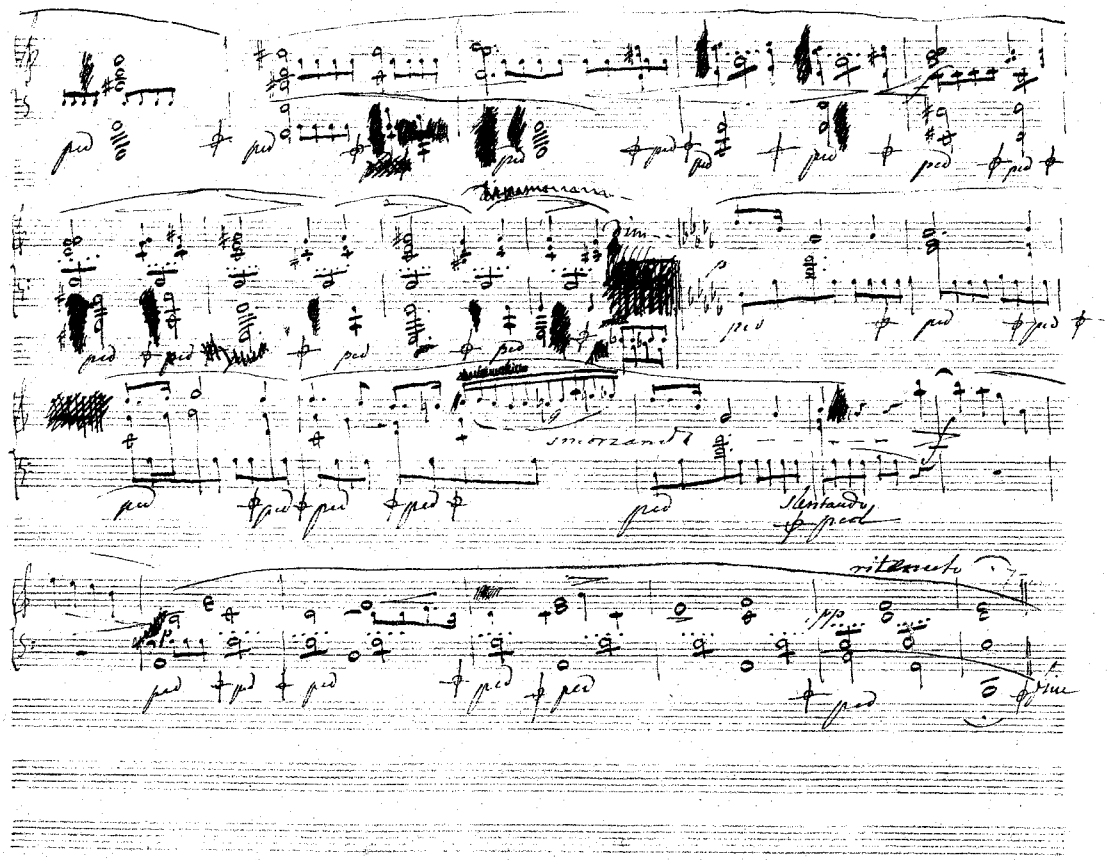
自筆楽譜　プレリュード第14番　変ホ短調



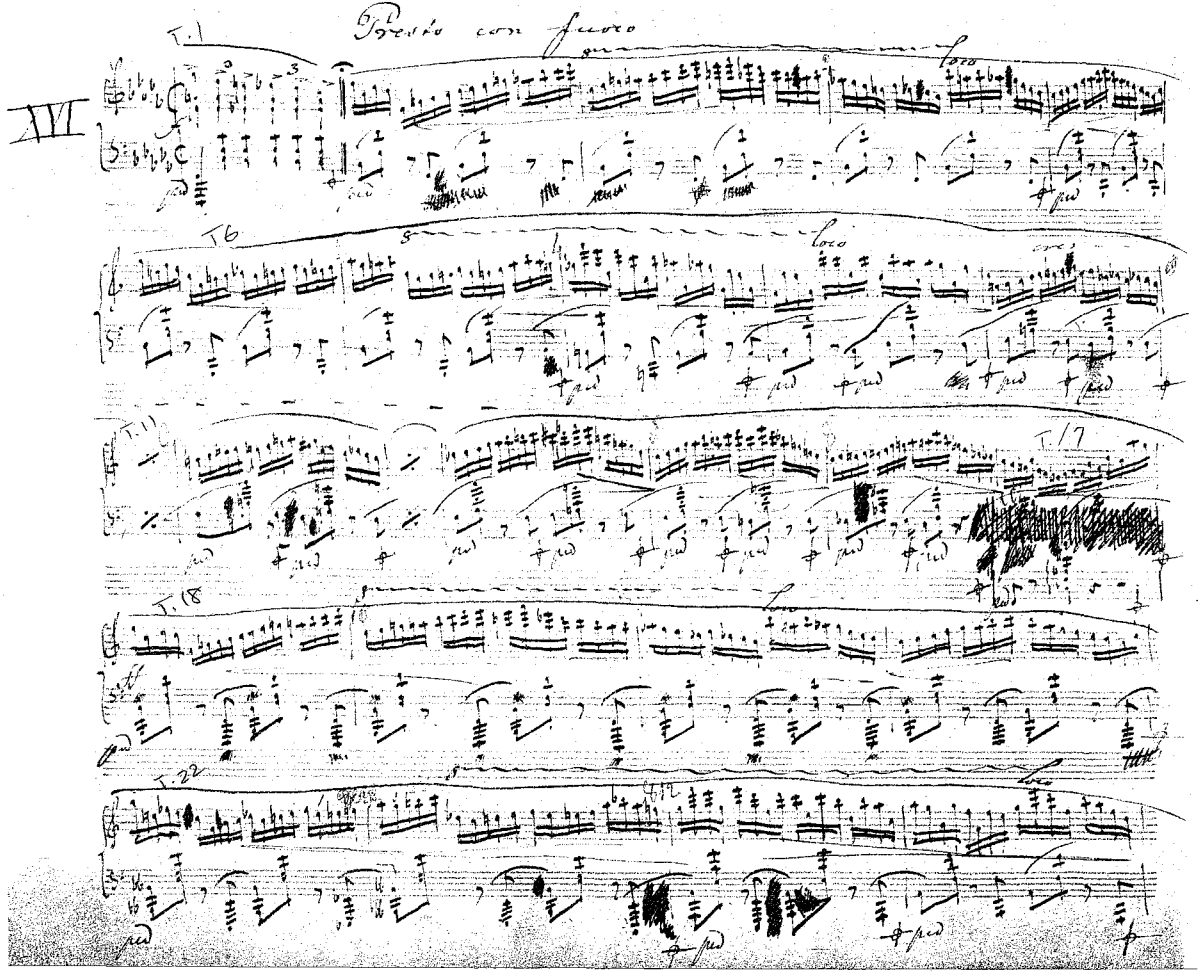
自筆楽譜　プレリュード第15番　変ニ長調①



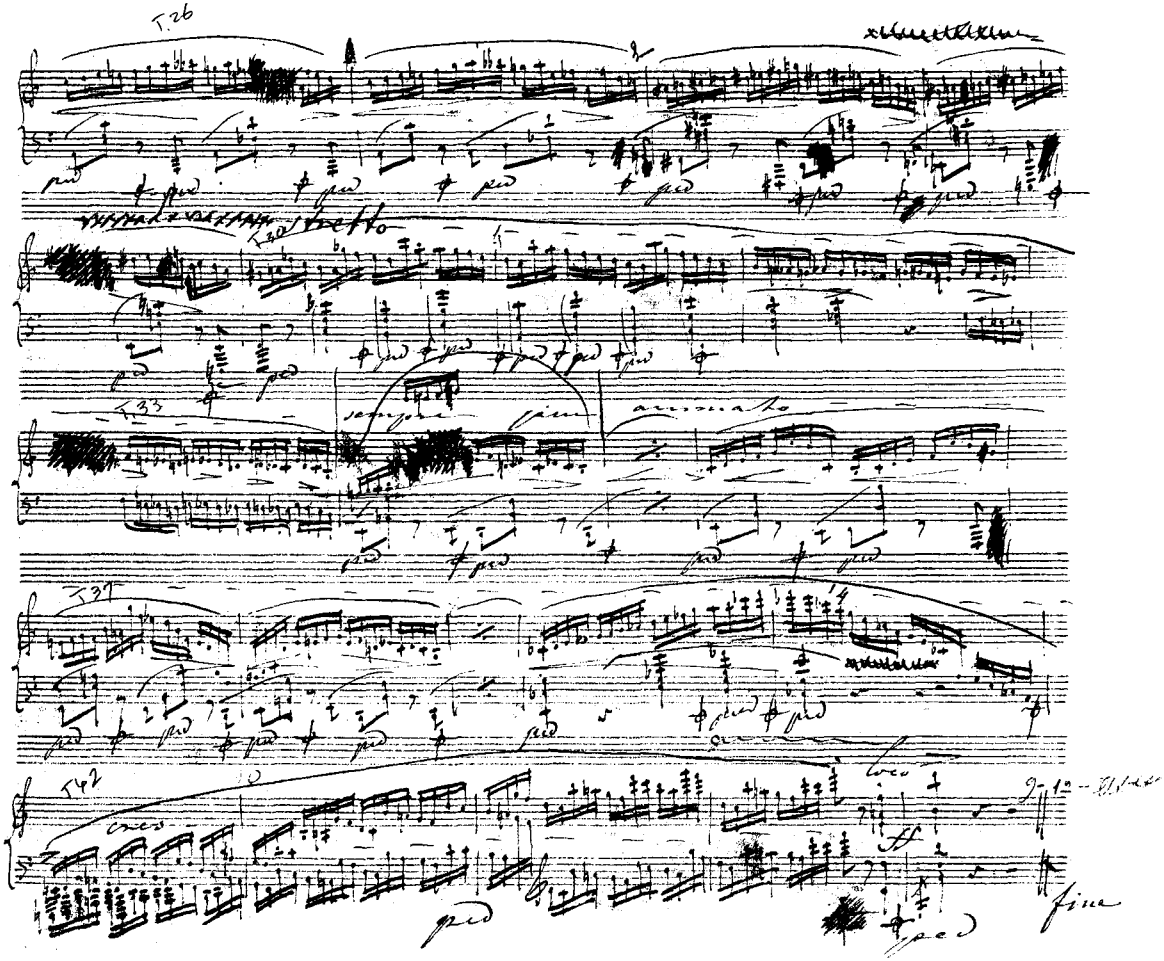
自筆楽譜　プレリュード第15番　変ニ長調②



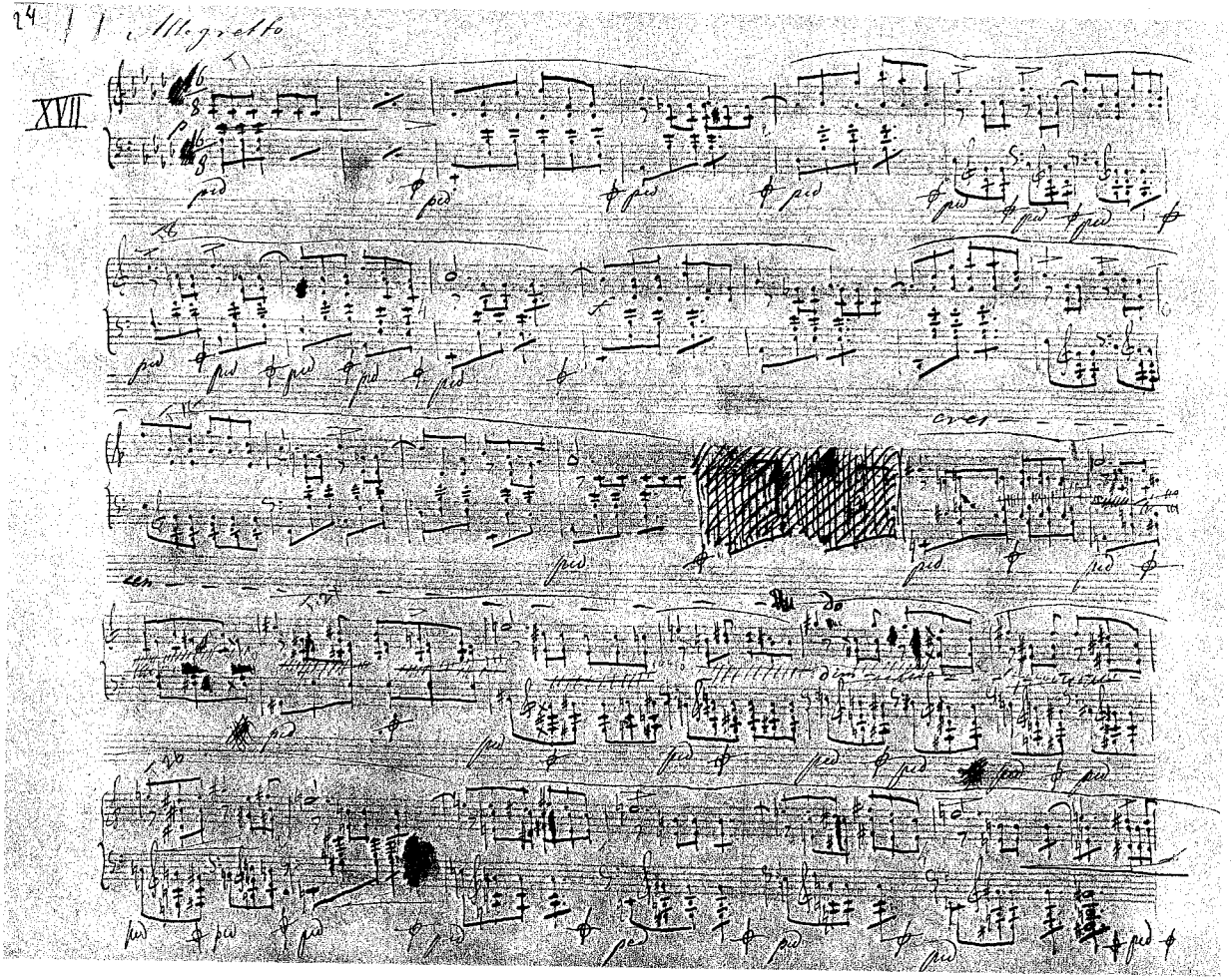
自筆楽譜　プレリュード第15番　変ニ長調③



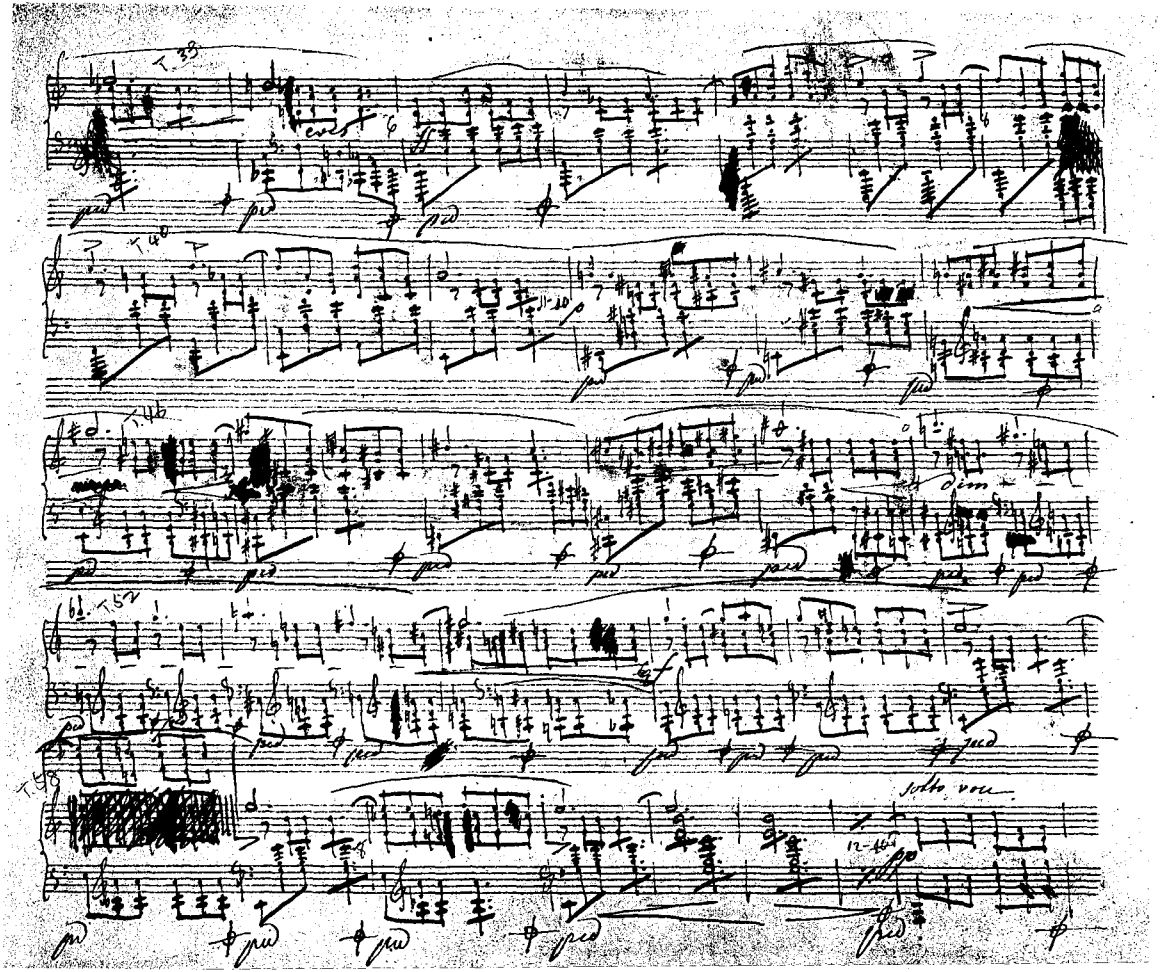
自筆楽譜　プレリュード第16番　変ロ短調①



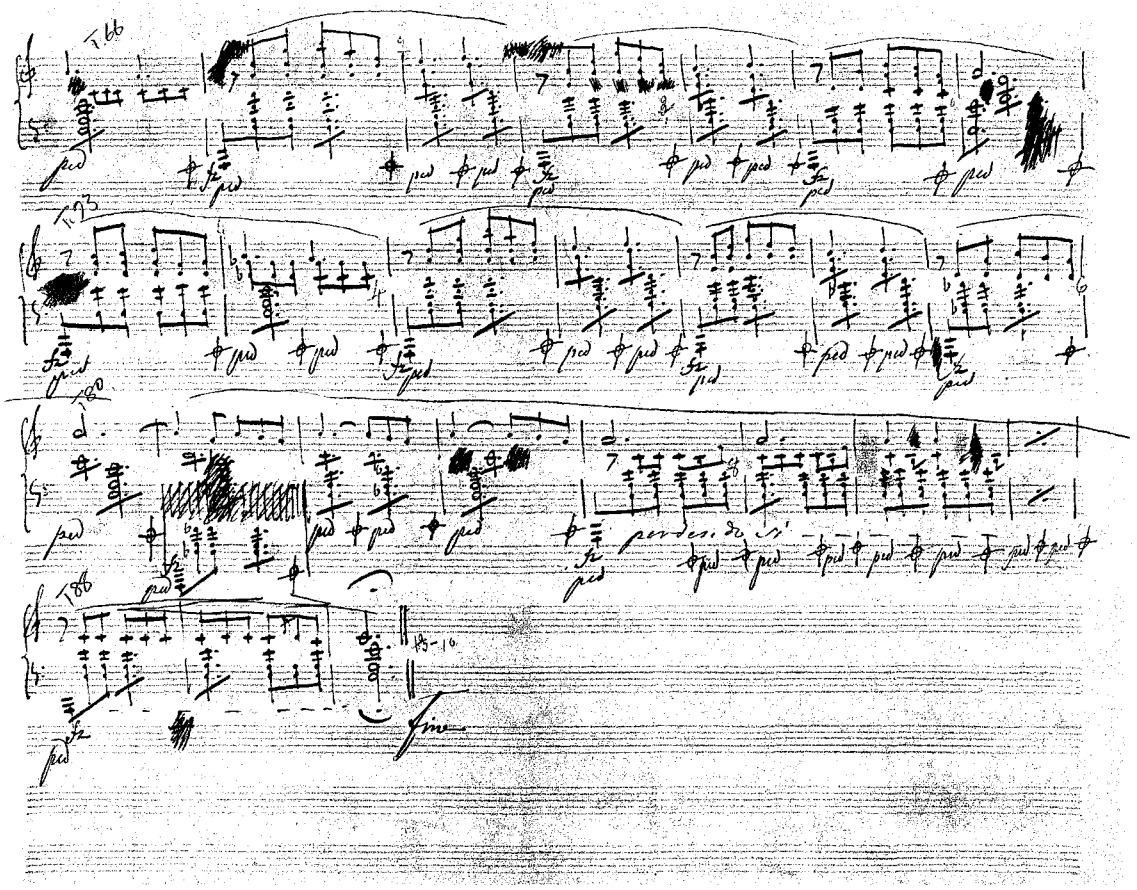
自筆楽譜　プレリュード第16番　変ロ短調②



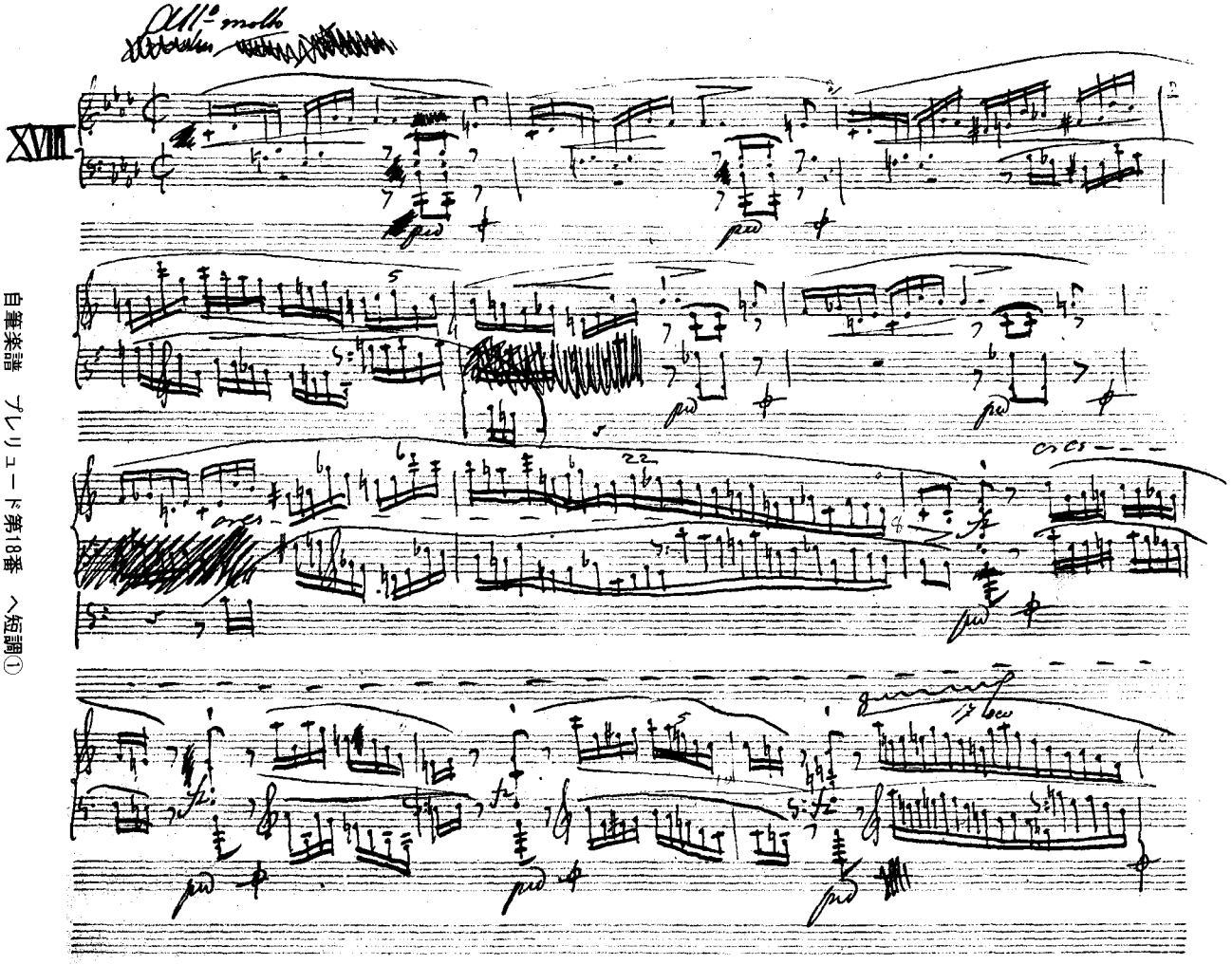
自筆楽譜　プレリュード第17番　変イ長調①



自筆楽譜　プレリュード第17番　変イ長調②

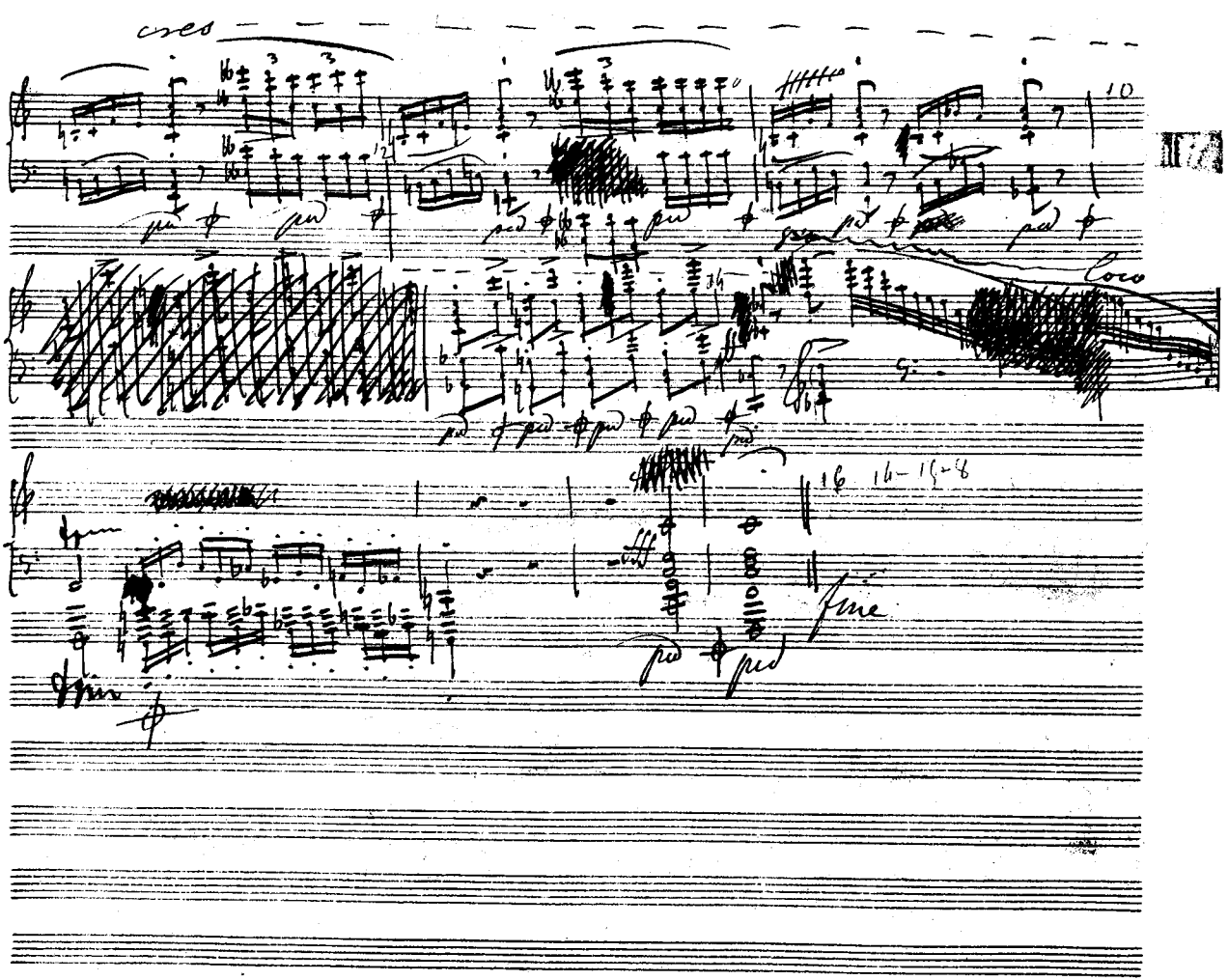


自筆楽譜　プレリュード第17番　変イ長調③

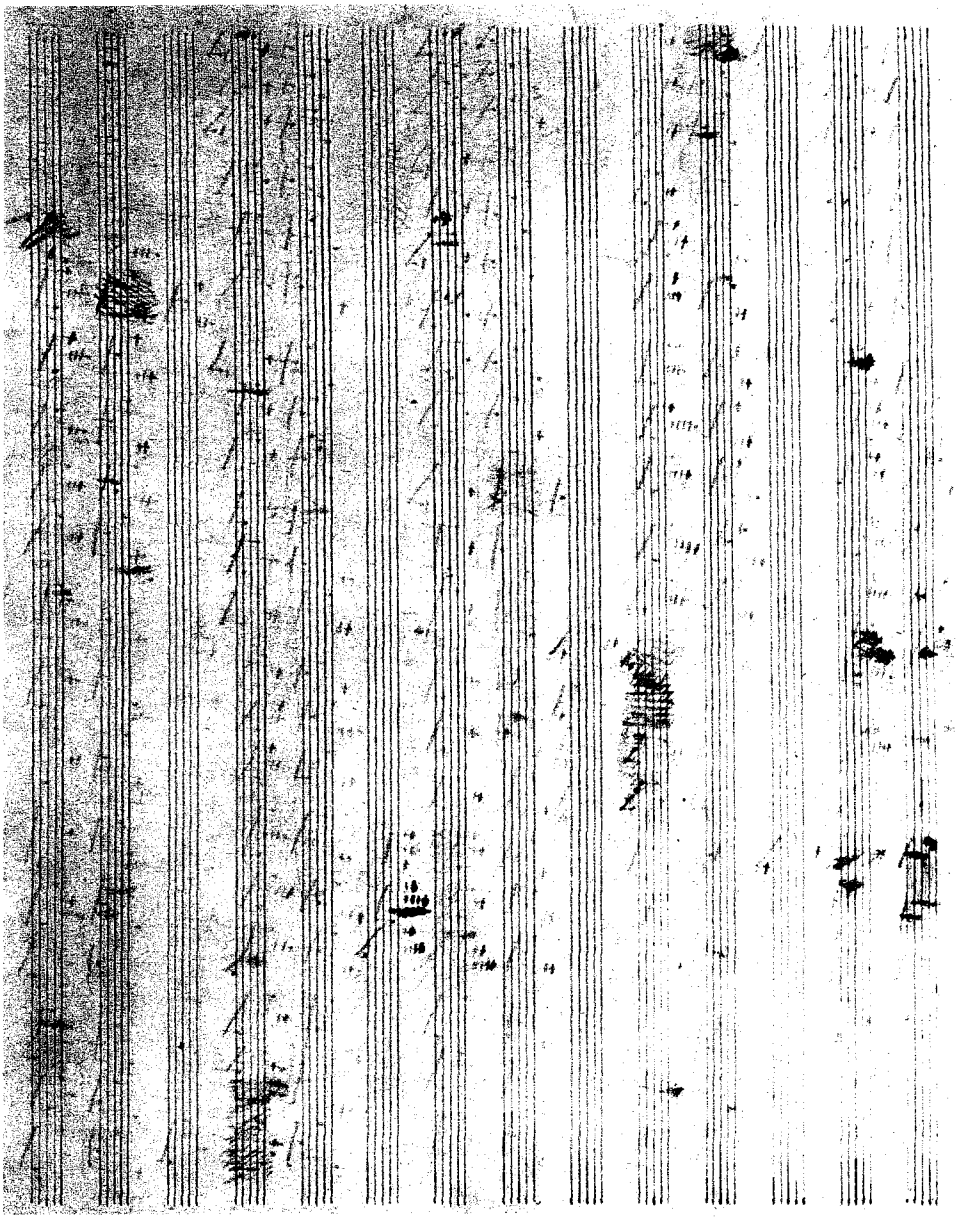


自筆楽譜　プレリュード第18番　ヘ短調①

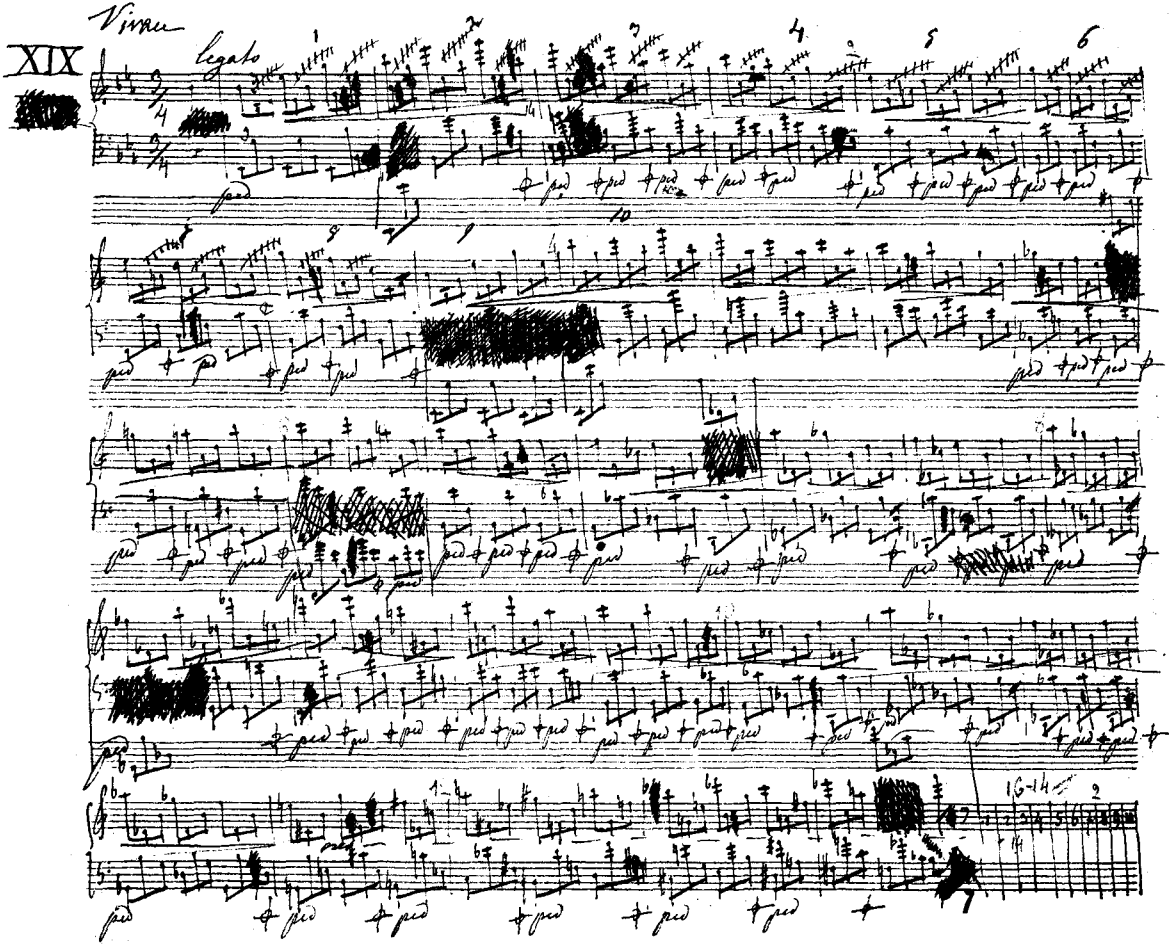
佐藤允彦



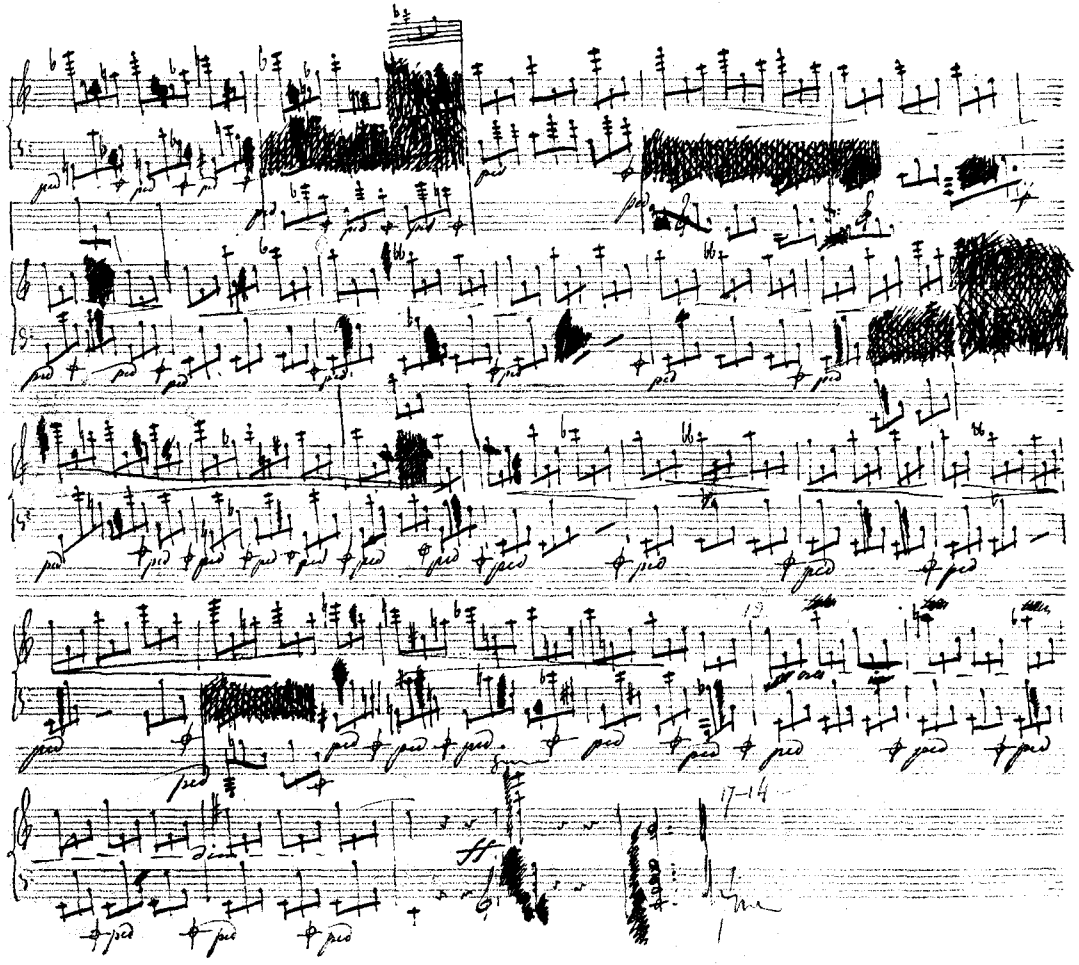
自筆楽譜　プレリュード第18番　ヘ短調②



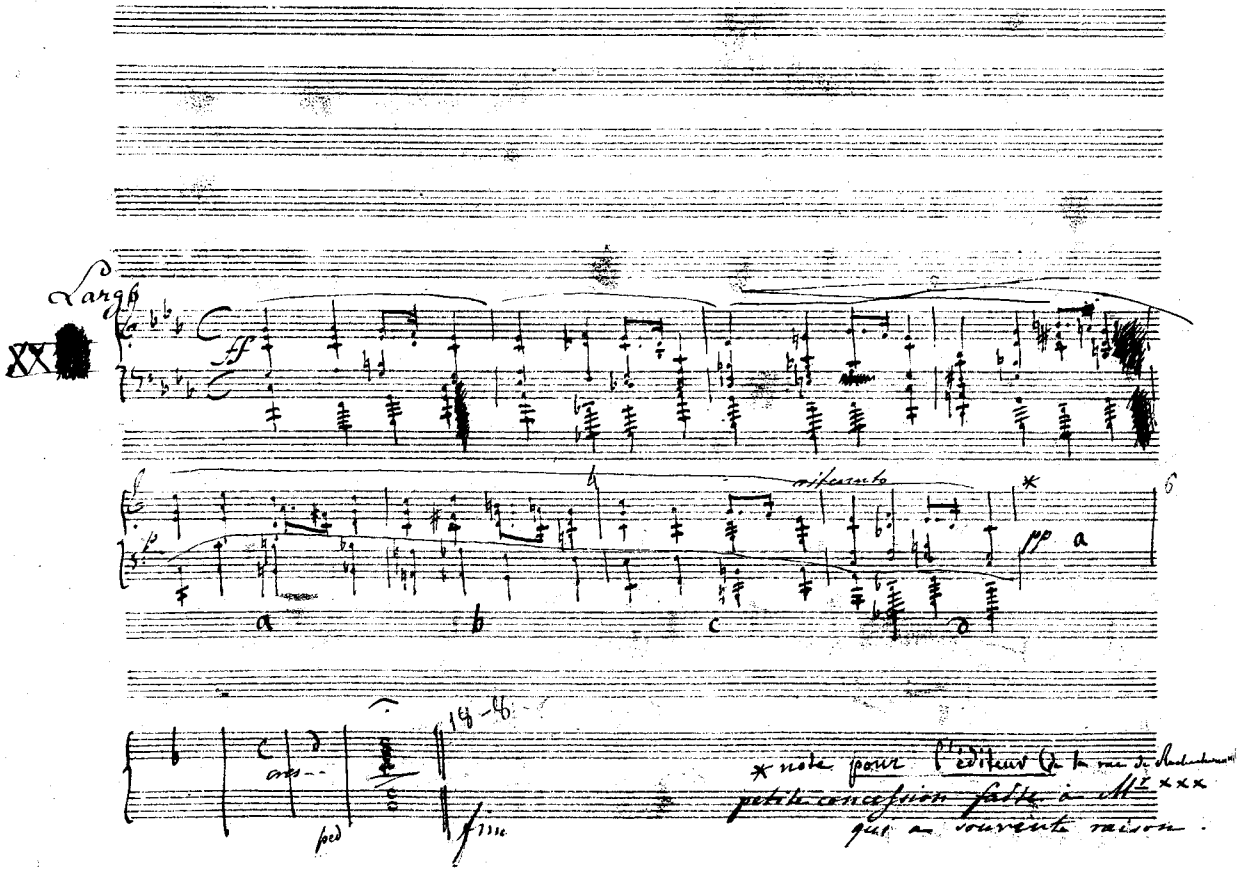
自筆楽譜　プレリュード第18番　ヘ短調③



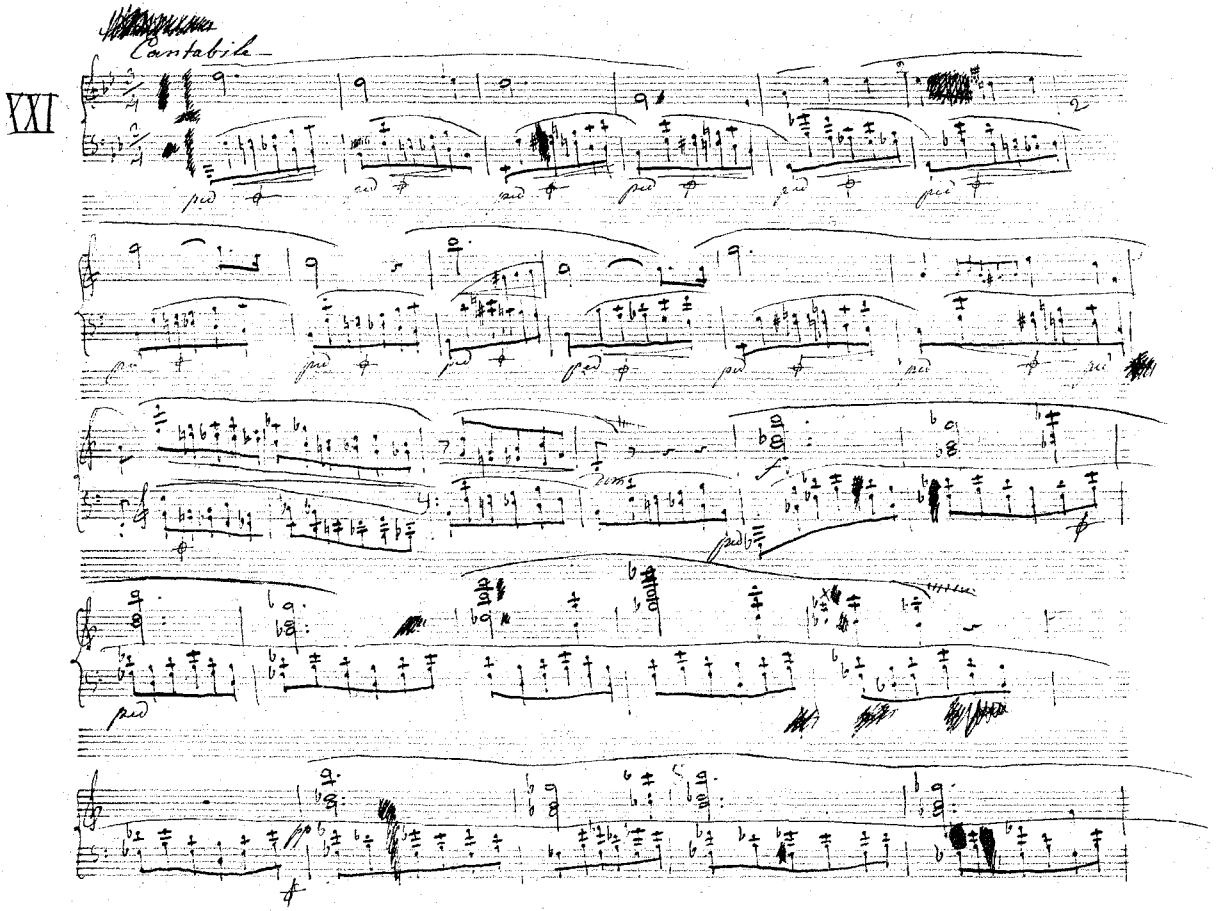
自筆楽譜　プレリュード第19番　変ホ長調①



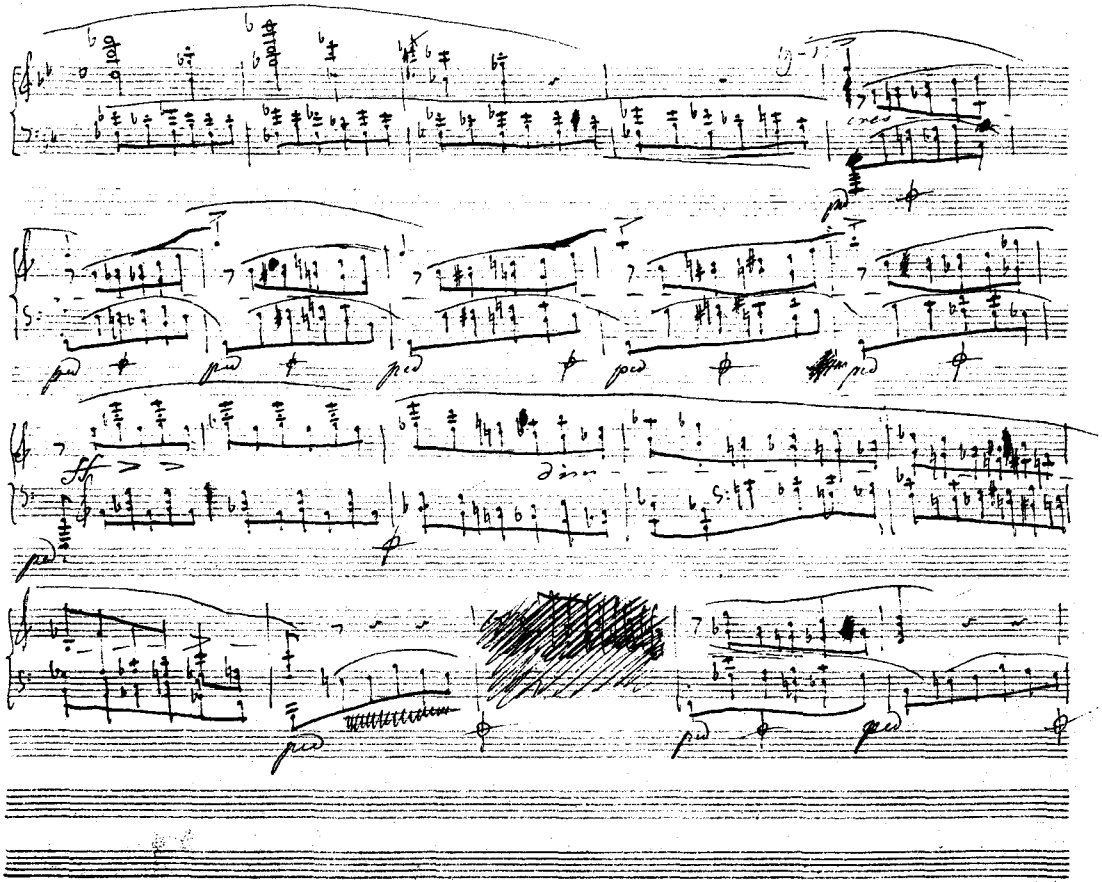
自筆楽譜　プレリュード第19番　変ホ長調②



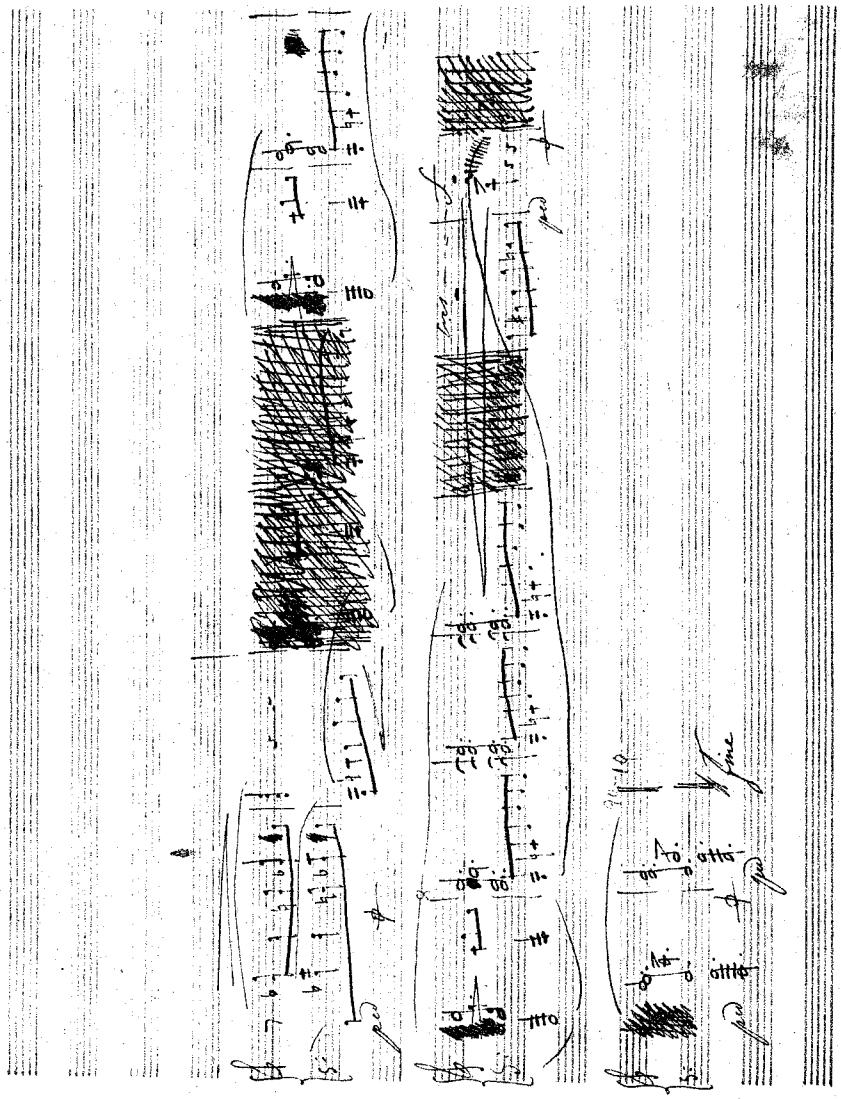
自筆楽譜　プレリュード第20番　ハ短調



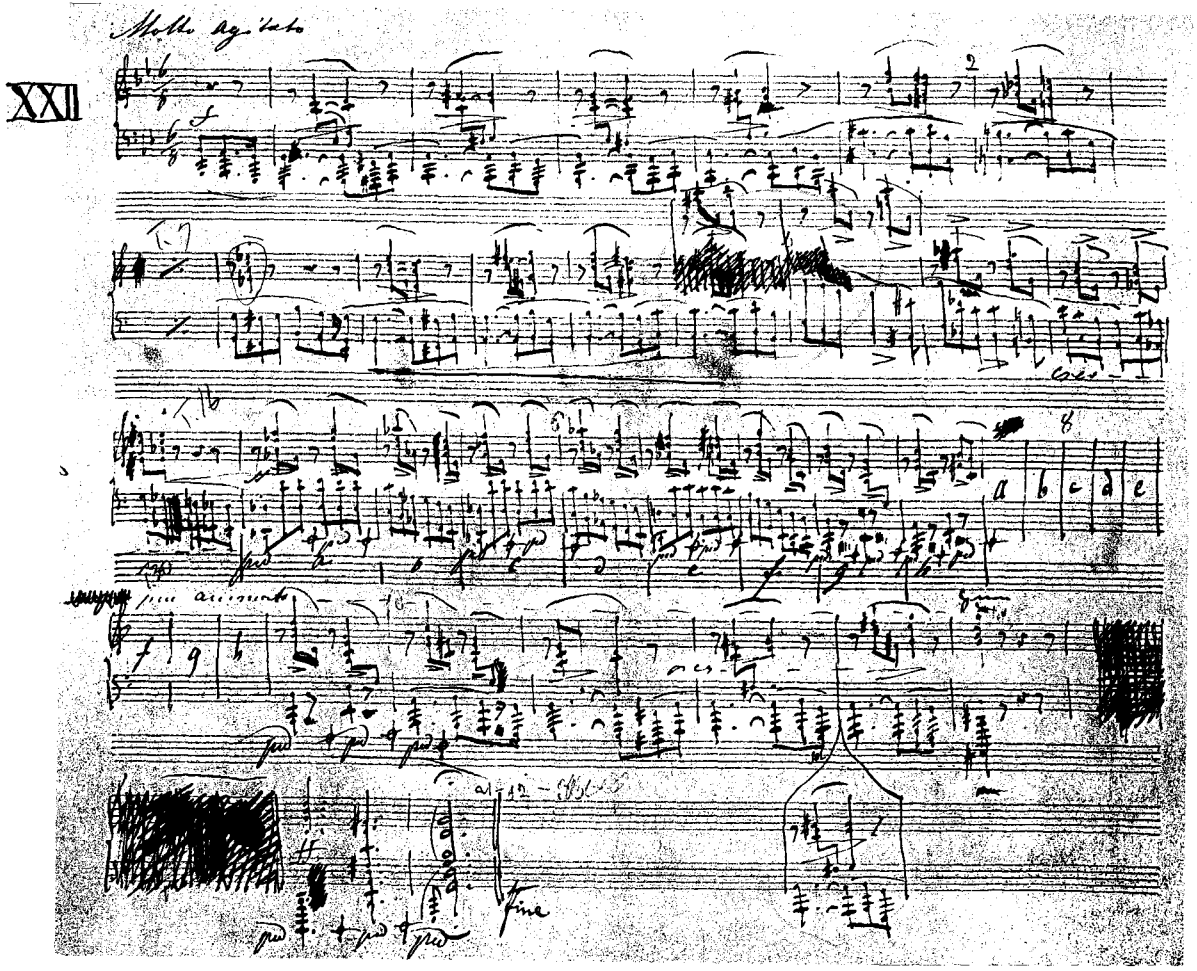
自筆楽譜　プレリュード第21番　変ロ長調①



自筆楽譜　プレリュード第21番　変ロ長調②

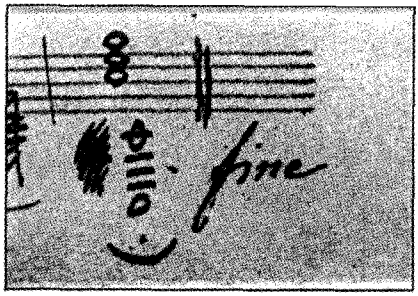


自筆楽譜　プレリュード第21番　変ロ長調③

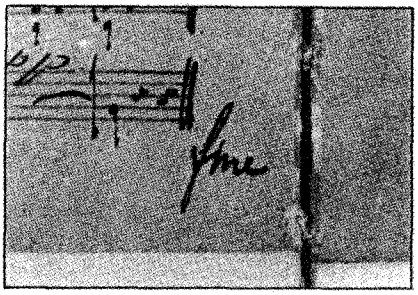


自筆楽譜　プレリュード第22番　ト短調

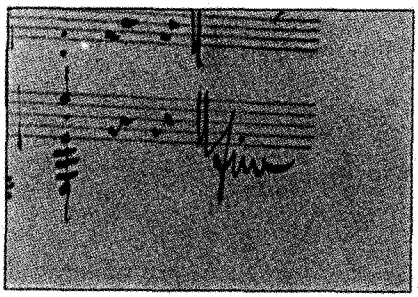
op. 28 - 2



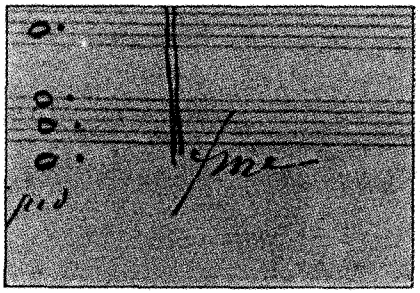
op. 28 - 4



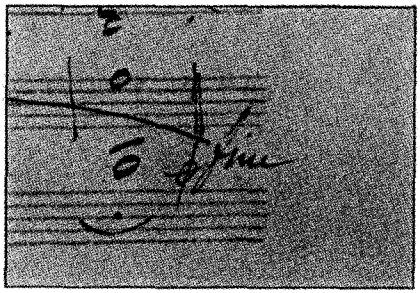
op. 28 - 6



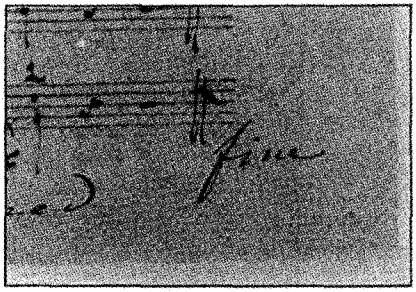
op. 28 - 12



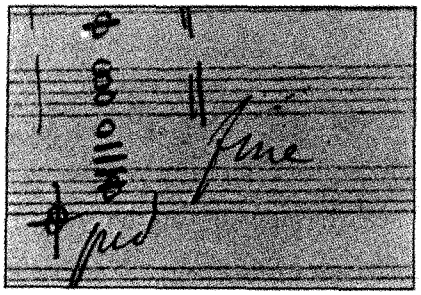
op. 28 - 13



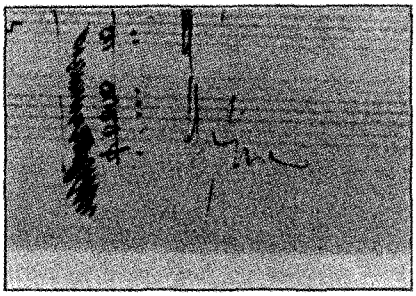
op. 28 - 15



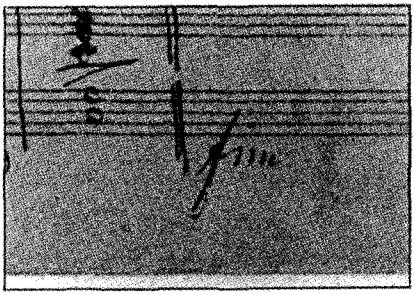
op. 28 - 16



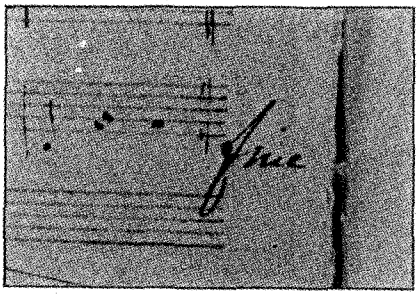
op. 28 - 18



op. 28 - 19

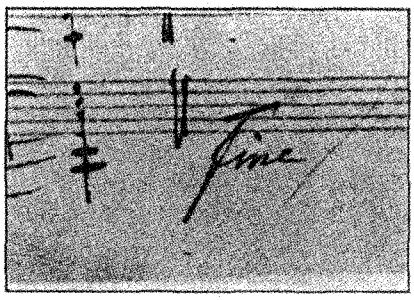


op. 28 - 20

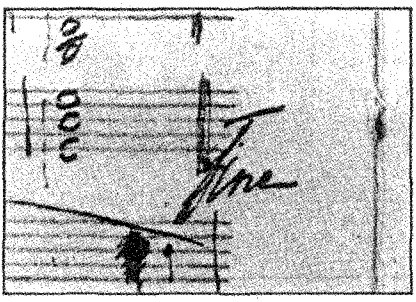


op. 28 - 23

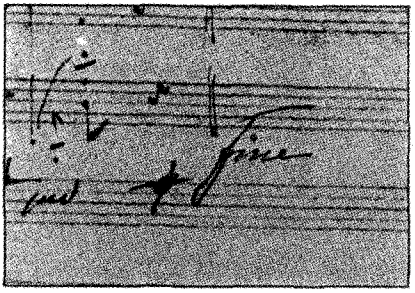
op. 28 - 24



op. 28 - 1

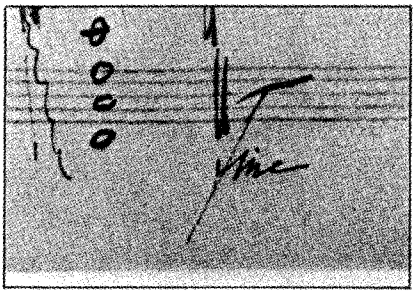


op. 28 - 3

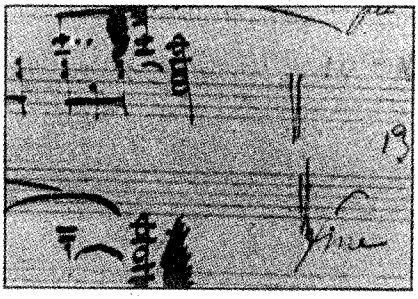


op. 28 - 5

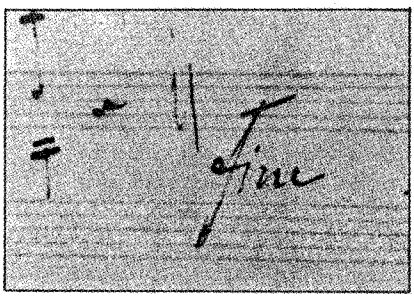
op. 28 - 7



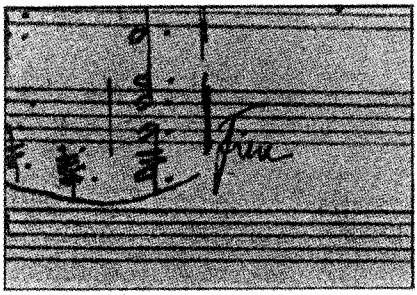
op. 28 - 8



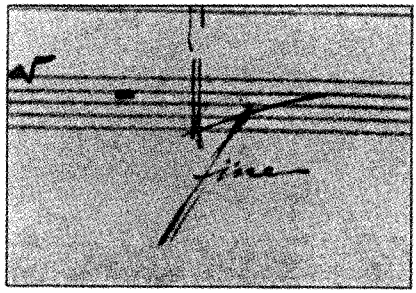
op. 28 -9



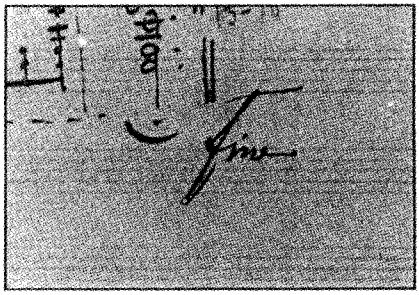
op. 28 - 10



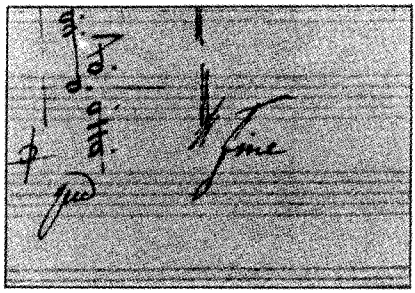
op. 28 - 11



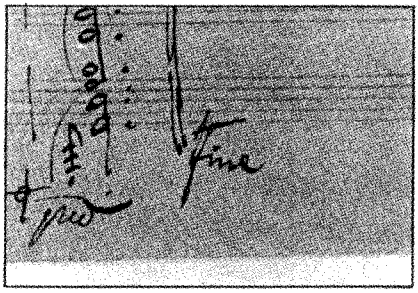
op. 28 - 14



op. 28 - 17



op. 28 -21



op. 28 - 22